

山形県立博物館研究報告

第 21 号

BULLETIN

OF

THE YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

NO.21

山 形 県 立 博 物 館
YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

Kajo-Machi, Yamagata City, Japan

February, 2000

山形県立博物館研究報告

第 21 号

BULLETIN

OF

THE YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

NO.21

山 形 県 立 博 物 館
YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

Kajo-Machi, Yamagata City, Japan

February, 2000

序

このたび、「山形県立博物館研究報告」第21号を刊行いたしました。

本館は、郷土山形県の自然や歴史・教育に関する情報センターとして、あるいは、広範な生涯学習の場としての役割を担っており、近年特に要請の強い、開かれた博物館として利用者の多様なニーズに対応しながら博物館運営に鋭意努めているところです。

こうした博物館活動の中で、最も中核とすべきことがらは、地道な調査研究に裏打ちされた種々の展示ではないかと予々考えておるところです。年1回の特別展や、春秋などの企画展などは、テーマに沿う資料の調査・研究・収集を重ねて、はじめて実現されてきています。

さて、本号には、平成11年度の企画展に関連する調査・研究から、『企画展やまがたの土偶展示報告』の論稿を掲載することができました。

また、「山形学」の調査・研究活動の立場から二編の論稿、『山形県天童市の上部中新統から産出したオオシロアリ類の化石』、『山形水野藩 戊辰の役 ―資料で確かめる―』も併せて掲載しています。地道な地域研究の成果として、広くご活用戴ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、今後とも一層のご指導・ご支援をお願い申し上げ、研究報告刊行の挨拶といたします。

平成12年2月

山形県立博物館

館長 安孫子 豊

目 次

序	館 長	
山形県天童市の上部中新統から産出したオオシロアリ類の化石	林 成 多 長 澤 一 雄	1
企画展「やまがたの土偶」展示報告	阿 部 明 彦	7
(右開き)		
山形水野藩 戊辰の役 ―資料で確かめる―	川 瀬 同	1

山形県天童市の上部中新統から産出したオオシロアリ類の化石

林 成 多*・長 澤 一 雄**

A fossil termite from the Upper Miocene Yamaguchi Formation in Barazaki, Tendo City, Yamagata Prefecture, Japan

Masakazu Hayashi* and Kazuo Nagasawa**

Abstract

The Yamaguchi Formation yields fossil insects relative rarely. The formation is distributed in the eastern part of Yamagata Basin and its age is Late Miocene (ca. 7-6 Ma). Three groups of insects, Apidae, Formicidae, and Pentatomidae were reported from the formation in Barazaki, Tendo City. We examined an additional fossil termite from the above locality. The fossil termite is well-preserved in the siltstone and its wings with visible venations. Its body size and venations are most similar to that of *Hodotermopsis iwatensis* Fujiyama which were described from the Late Miocene Masuzawa Formation in Sizuikuishi, Iwate Prefecture, but their branch shapes of media (M) + cubitus (Cu) differ from each other. Therefore, we identified the fossil termite as an extinct species, *Hodotermopsis* sp. aff. *H. Iwatensis* Fujiyama, and described it in this paper.

は じ め に

山形県産の昆虫化石の産地は、長澤・山野井(1990)により総括され、5産地が知られている。これらの産地のうち、天童市原崎の丘陵の土取場に発達する上部中新統の山口層からは、ミツバチ属やアリ科、カメムシ科の化石が報告されている(長澤・山野井, 1990)。ここで報告する昆虫化石は、1994年に仲野勇太氏(当時小学生)によって、やはり天童市原崎の同じ土取場の山口層から、

転石として採集されたものである(図1)。

今回、この化石を検討した結果、オオシロアリ類の化石であることが明らかになった。そして、これまで報告された国内の第三紀のシロアリ目の化石の中でも、特に保存状態が良く、東北地方における後期中新世の昆虫相を考察する上でも重要な化石であると考えられた。そこで、本論ではこの化石を記載するとともに、その産出の意義について報告する。

* 新潟大学大学院自然科学研究科, Graduate School of Science and Technology, Niigata University.

** 山形県立博物館, Yamagata Prefectural Museum.

化石産地と地質

天童市原崎の化石産地を含む丘陵は、山形盆地東縁部に位置し、軽石凝灰岩・凝灰質砂岩・凝灰質シルト岩等の互層からなる。この地層は、山形盆地東部地域の最上部を構成する山口層に区分されている(舟山, 1985)。化石産地周辺における山口層は、南方～東方では基盤の花崗岩類や中部中新統の楯岡層に属する流紋岩類を不整合に覆い、また北方では上部中新統の山寺層を不整合に覆っており、層厚は100m以上である(舟山, 1985)。山口層は、後期中新世に脊梁山脈の西翼で形成されたカルデラを埋積する湖成層と考えられる。脊梁東翼の仙台地域にも、類似した岩相の上部中新統の白沢層が分布しており、山口層と同じカルデラ湖を埋積した堆積物と考えられている(北村編,

1986)。山口層に関する放射年代の検討はこれまでなされていないが、本地域の層序から推定すれば、6～7 Ma程度と考えられる。

山口層のうち、ラミナの発達するシルト岩からは、従来から植物化石が多産することが知られている。これらの化石の記載分類学的な報告はなされていないが、植物組成は冷温性落葉広葉樹を主体としており、後期中新世のいわゆる三徳型植物群に属するものであろう。山口層の昆虫化石は、これらの植物化石とともに、まれに産するものである。なお、山形県立博物館所蔵の同層産の植物化石については、長澤・大場編(1998)でまとめられている(表1)。

土取場における山口層は、最近の丘陵脚部の掘下げ工事によって、従来より下位の層準が露出し

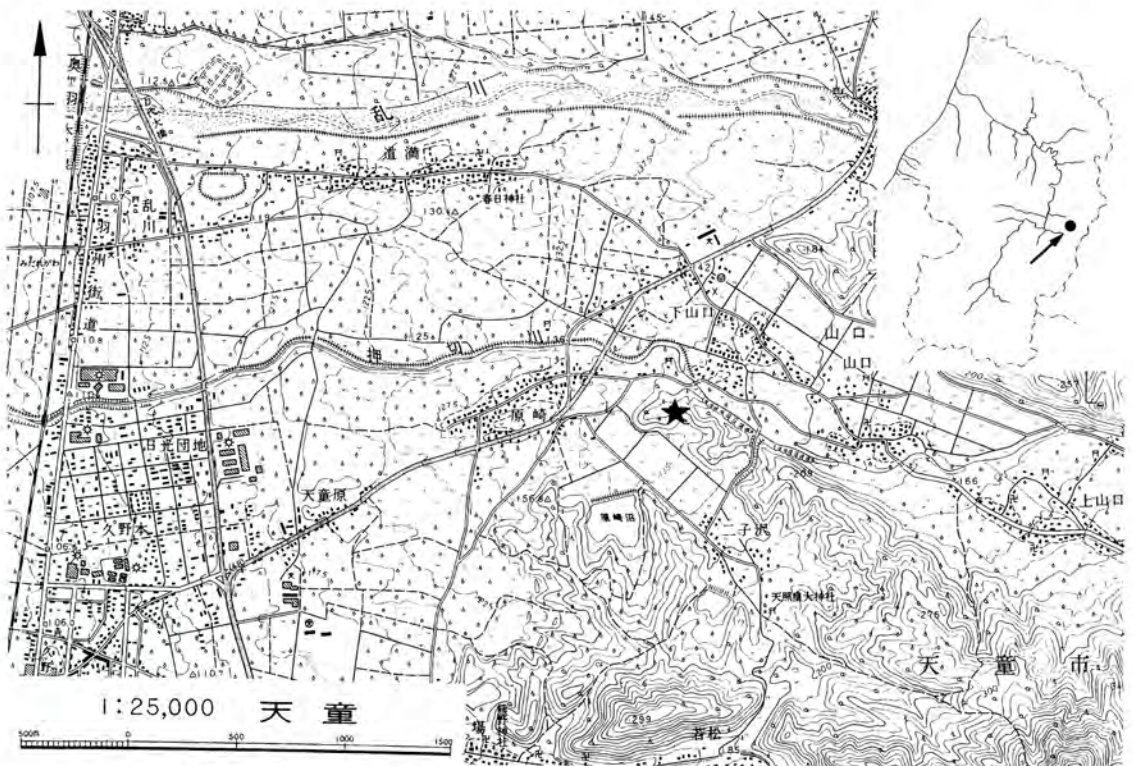


図1. 昆虫化石の産出地点(★). 国土地理院発行2万5千分の1地形図「天童」を使用した。

Fig. 1. The fossil locality of Barazaki, Tendo City, Yamagata Prefecture.

Part of the topographic map of "Tendo", scale 1:25,000, by the Geographical Survey Institute.

てきており、層厚約30mが観察できる。これらは北東走向で、西へ10°前後傾斜する。このうち中～下部においては、塊状の軽石凝灰岩層が発達し、このなかにときおり数10cmから1mの厚さのラミナの発達した凝灰質シルト岩を挟む。この中～下部層準では化石はほとんど産しない。上部においては、ラミナの発達する凝灰質シルト岩と塊状の軽石凝灰岩層や砂質凝灰岩が、数10cmから数mの層厚で互層をなすように変化する。

植物化石を産するのは、主としてこの上部に発達するシルト岩質層からである。植物化石の産状は、完全な葉化石よりも、むしろ破片状になって集積したようなものが多い。この凝灰質シルト岩層は、より上位層準ほど発達する。

今回報告する昆虫化石の母岩もまた、凝灰質シルト岩である。転石のために正確な化石の産出層準はわからないが、植物化石の産出状況や露頭全体の層相変化から推察して、本標本は丘陵を構成する上部層準の凝灰質シルト岩層に含まれていた可能性が大きいと考えられる。

標本の記載

Order Isoptera

シロアリ目

Family Hodotermitidae

シュウカクシロアリ科

Genus *Hodotermopsis*

ホドテルモプシス属

Hodotermopsis sp. aff. *H. Iwatensis* Fujiyama

(図2, 図版I)

産地：山形県天童市原崎

産出層：上部中新統山口層

採集：1994年5月10日 仲野勇太

保管：山形県立博物館

表1 山口層産大型植物化石。
(植村和彦同定：長澤・大場編, 1998より)

Table 1. A list of plant fossils from the Yamaguchi Formation.

All fossils are identified by Dr. Uemura (after Nagasawa and Oba ed., 1998)

Metasequoia sp.

Populus sp.

Pterocarya sp.

Carpinus heigunensis Huzioka.

Btula protoglobispica Tanai and Onoe

Betula sp.

Alunus cf. *hirsuta* Turz.

Alunus subfirma Tanai and N. Suzuki

Alunus sp.

Fagus stuxbergi (Nathorst) Tanai

Ulmus sp.

Zelkova ungeri (Ett.) Kovats

Zelkova sp.

Lindera obtusiloba Bl.

Lindera sp.

Prunus sp.

Hovenia sp.

Cladrastis sp.

Ilex sp.

Celastrus sp.

Acer cf. *mono* Maxim.

Acer integririmum (Viv.) Massalonga

Acer cf. *carpinifolium* Sieb. and Zucc.

Acer palaeodiabolicum Endo

Acer sp.

Tilina sp.

Stewartia sp.

Liriodendron sp.

Clethra maximoviczi Nathorst

Fraxinus sp.

Deutzia sp.

Gramineae

Leguminosae

Dicotyledoneae

Pinaceae

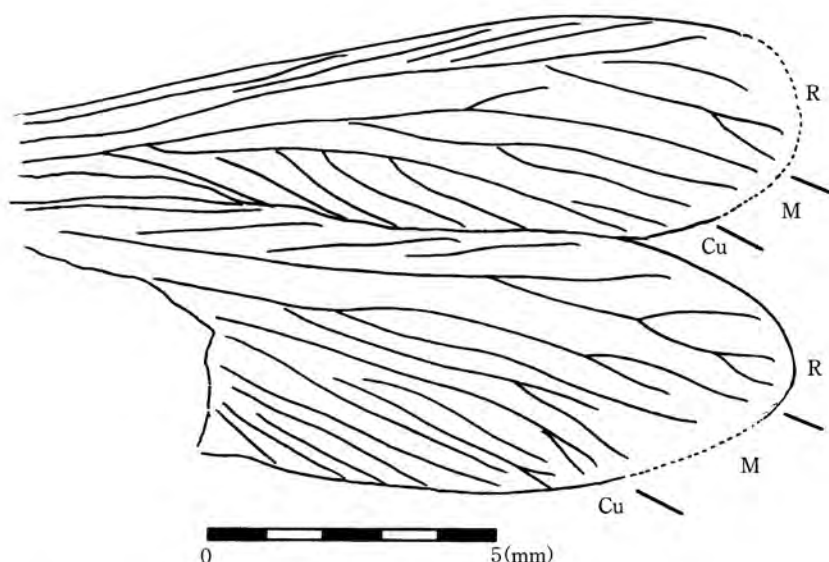


図2. 山口県産のオオシロアリ類の化石 (*Hodotermopsis* sp. aff. *H. iwatensis* Fujiyama). 右前翅および後翅のスケッチ. R(径脈), M(中脈), Cu(肘脈).

Fig. 2. *Hodotermopsis* sp. aff. *H. iwatensis* Fujiyama from the Yamaguchi Formation right wings. R=radius; M=media; Cu=cubitus.

標本：ほぼ1個体分（頭部，胸部，腹部，左右前・後翅）

保存状態：本標本は，シルト岩中に平圧された状態で含まれており，背面側が露出している．頭部は破損しているが，左右の前・後翅がほぼ完全に保存される．ただし，主な翅脈は，溝状または隆線状の凹凸として残っているが，細かな翅脈はやや不明瞭である．胸部と腹部も保存されるが，腹部の母岩表面に露出していない部分は，堆積物中に残っている可能性が高い．

記載：頭部は破損しているため，詳しい観察ができない．胸部において，胸部背板の表面は平滑である．前胸背板は中胸背板より幅が広く，前角はやや前方に突出して先端は丸みを帯びるが，後角および後縁は全体に丸く弧状である．前翅の先端は丸く，亜前縁脈は不明であり，径脈は少なくとも4本の枝をもつ．また，中脈は2本の枝をもち，肘脈は少なくとも5本の枝をもつ．後翅の先

端も丸く，亜前縁脈は不明で，径脈は少なくとも6本の枝をもつ．また，中脈は4本の枝をもち，肘脈は少なくとも1本の枝をもつ．腹部では，背面側の5節が確認できる．前肢の腿節は太い．

計測値：体長9mm+；前翅の長さ14.5mm，最大幅4.5mm；後翅の長さ15.0mm，最大幅4.5mm．

同定：本標本の特徴は，他のオオシロアリ類の各種と比較して，前・後翅ともに翅脈数が多いが，中脈や径脈の分岐や癒合が少ないことである．これに注目して，従来記載された種と比較すると，本標本は岩手県雫石町の舩沢層（後期中新世）から記載された，絶滅種のシロアリ類である *Hodotermopsis iwatensis* Fujiyamaに，体のサイズおよび翅脈の形態がほぼ一致することが判明した．ただし，細部の翅脈形態において，径脈や中脈の分岐の形状に違いがみられる．この差異が個体変異によるか，あるいは種の違いによるものなのか，標本1点のみでは議論が困難であるため，ここで

は*Hodotermopsis* sp. aff. *H. iwatensis*としておく。

なお, Fujiyama (1983) は, *Hodotermitidae* 科に *Hodotermitinae* 亜科や *Termopsinae* 亜科を含む分類体系を採用している。しかし, 平嶋ほか (1989) は, この *Termopsinae* 亜科については, *Hodotermitidae* 科から独立した科とする体系を採用している。本論では, 平嶋ほか (1989) に従い, *Hodotermitidae* は シュウカクシロアリ科, *Termopsidae* には オオシロアリ科の和名を用いている。

本標本の意義

オオシロアリ類 (シュウカクシロアリ科やオオシロアリ科) は, 現生のシロアリ類の中では原始的なグループとされ, これまで東北地方の新第三系から4種が記載されている (Fujiyama, 1983)。本標本は前述のように, *H. Iwatensis* Fujiyama と同種あるいは近縁種と考えられ, 種は未決定であるが絶滅種であろう。これらの種を含む *Hodotermopsis* 属の現生種は, 奄美大島や屋久島, 九州南端部など分布する1種と, ベトナム北部に分布する1種のみである。そして, これら2種は, 地質時代の遺存種と考えられている (Fujiyama, 1983)。

H. iwatensis の模式地の岩手県の舳沢層, および本標本を産した山口層はともに後期中新世である。従って, これら標本によって, 現在東アジアの熱帯～亜熱帯地域の一部にのみ分布するオオシロアリ類の *Hodotermopsis* 属が, この時期には日本列島の東北地方にまで分布を広げていたことがより明

らかになった。

謝 辞: 本標本は, 当時天童市立山口小学校5年生の仲野勇太氏によって採集され, 同校元校長の鈴木 強氏によって本館へ調査依頼されたものである。今回の研究の機会を与えて下さった両氏に, 厚くお礼申し上げる。また, 本文に引用した本館所蔵資料目録の山口層産植物化石は, 国立科学博物館の植村和彦博士に同定していただいたものである。記して改めてお礼申し上げる。

文 献

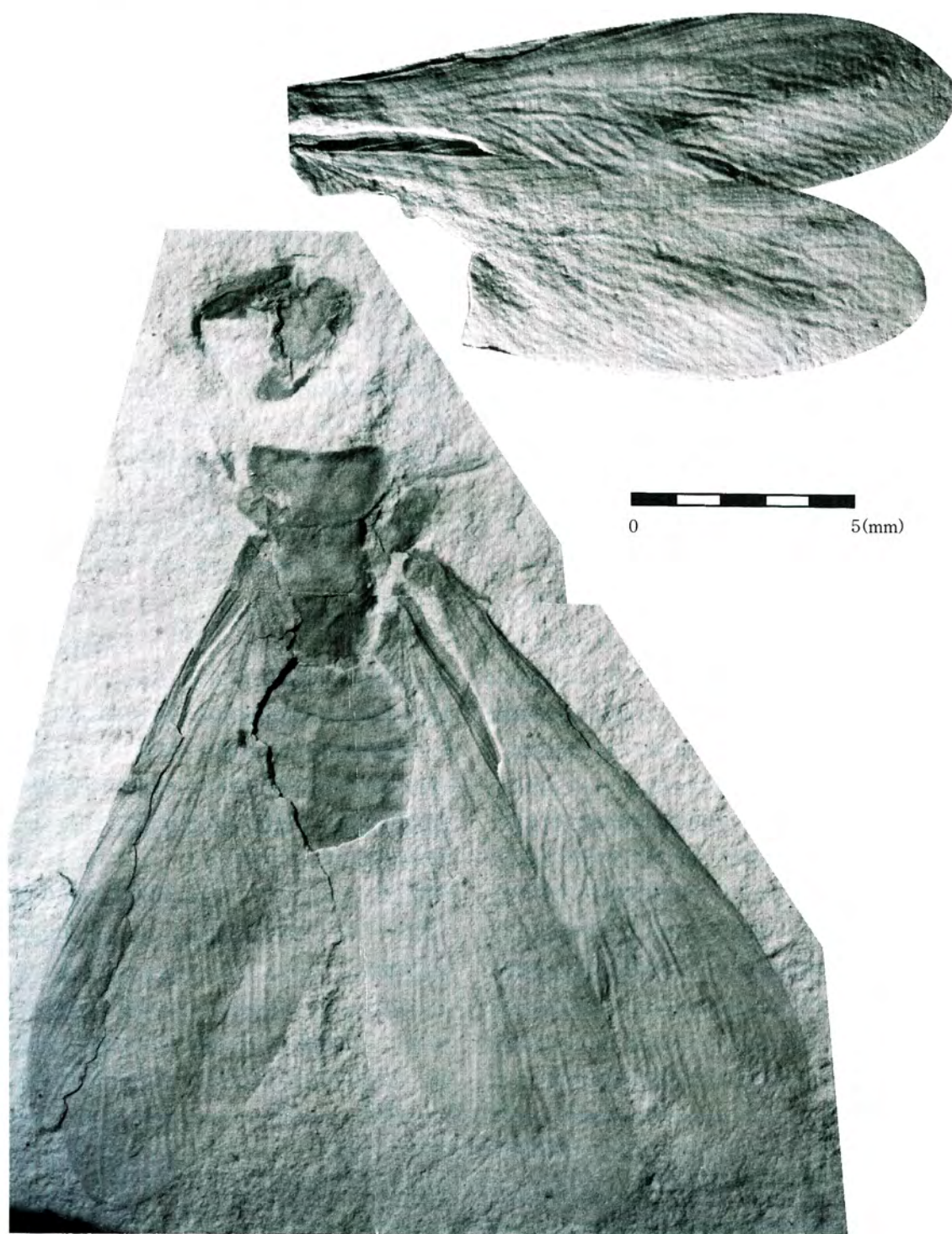
- Fujiyama, I., 1983: Neogene Tremites from Northeastern districts of Japan, with references to the occurrence of fossil insects in the districts. *Mem. Natl. Sci. Mus.* no. 16, 83-97, pl. 7.
- 舟山有士, 1985: 山形盆地東縁部の新第三系について。皆川信弥教授記念論文集 山形県地質誌, 141-157.
- 平嶋義宏・森本 桂・多田内修, 1989: 昆虫分類学。597p., 川島書店, 東京。
- 北村 信編, 1986: 新生代東北本州弧地質資料集 島弧横断ルートno. 23, 宝文堂, 仙台。
- 長澤一雄・山野井徹, 1990: 山形県天童市原崎の上部中新統山口層から産出した昆虫化石。山形県博研報, 11, 11-19.
- 長澤一雄・大場 總編, 1998: 山形県立博物館収蔵資料目録 地学資料目録 I。332p., 山形県立博物館。

図 版 説 明

Explanation of plate

- 図 版 I 山形県天童市山口層産のオオシロアリ類の化石 (*Hodotermopsis* sp. aff. *H. iwatensis* Fujiyama)。右上は同じ個体の右前翅および後翅。スケールは共通。
- Plate I *Hodotermopsis* sp. aff. *H. iwatensis* Fujiyama

図 版 I (林 成多・長澤一雄)



企画展「やまがたの土偶」展示報告

阿 部 明 彦

1 はじめに

山形県立博物館では平成11年4月24日(土)～6月27日(日)の会期で、本館第3展示室を会場として企画展「やまがたの土偶」を開催した。この報告は展示期間中に果たせなかった図録等刊行による記録的役割とその概要についての紹介を兼ねるものである。また、その後に発見された注目すべき資料若干も加えて現時点における山形県における土偶研究の現状を補足的に概観して行く。

2 開催の主旨と展示構成

本展では縄文時代の精神文化を代表する県内各地から出土したさまざまな土偶を取り上げた。この人形をした「土偶」は、妊婦や豊満な女性像を象徴的に表現するものが多いことから、豊饒を願う女神像と考えるのが一般的な理解である。また、故意に壊された状態でみつかることも多いため、生命の輪廻転生を象徴する祈りや祭事の主人公としての役割も併せて推測される。

県内から出土したこのような土偶は、現在までのところその数715点余を知ることができるが、本展ではこれらの中から代表的な土偶および土偶関連資料434点を地域・年代別に選抜して紹介してきた。これら展示品を通して、やまがた各地の地域や時代別による女神像の変遷を窺うと同時にその造形に託された縄文人の願いの一端に触れてもらうことが主旨である。

展示の柱および構成は次のとおりであった。

- I やまがたの (概説、分布図、出土地一覧表、地
土 偶 域別時期別出土割合グラフ等、

展示資料一覧)

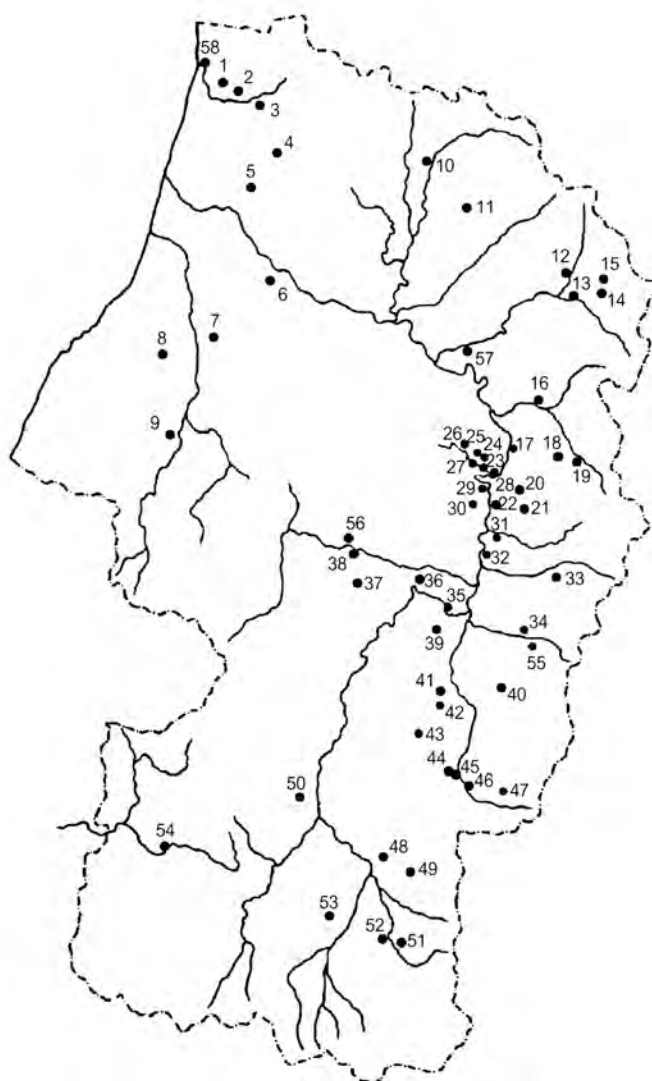
- II 置賜の土偶 (解説、置賜の土偶一覧、時期別出土割合グラフ等)
- III 村山の土偶 (解説、村山の土偶一覧、時期別出土割合グラフ等、渡戸遺跡に於ける土偶出土状況パネル)
- IV 最上の土偶 (解説、最上の土偶一覧、時期別出土割合グラフ等)
- V 庄内の土偶 (解説、庄内の土偶一覧、時期別出土割合グラフ等、ポーズ土偶の伝播経路)
- VI 土偶の周辺 (解説、動物形中空土製品分布図)

3 展示の概要

(1) やまがたの土偶

土偶は今から約8,000年～9,000年ほど前の縄文早期前半に出現し、この後、縄文時代を通して製作された。やまがたでは縄文前期前葉(大木2～3式)の天童市上荒谷遺跡の土偶が今のところ最も古く、縄文前期後葉(大木5～6式)の寒河江市高瀬山遺跡の土偶がこれに継ぐ。

縄文中期前葉になると米沢市台ノ上遺跡や最上町水木田遺跡のように一つの遺跡からたくさんの土偶が出土するようになるが、一方ではほとんど土偶の出ない遺跡もあるなど、土偶と縄文文化の関係は一様でなかったことが理解される。また、中期も終りに近づくと土偶の出土数が激減する状況に遭遇する。このように土偶の製作や在り方は時期や遺跡の性格によって大きく異なっていたと考えられる。



- | | | | | |
|------------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1 神矢田遺跡 | 2 金俣遺跡 | 3 杉沢遺跡 | 4 蔵台遺跡 | 5 山谷新田遺跡 |
| 6 東興野遺跡 | 7 玉川遺跡群 | 8 岡山遺跡 | 9 砂川A遺跡 | 10 釜淵遺跡 |
| 11 本町遺跡 | 12 げんだい遺跡 | 13 水木田遺跡 | 14 水上遺跡 | 15 材木遺跡 |
| 16 漆坊遺跡 | 17 落合遺跡 | 18 巾遺跡 | 19 原の内A遺跡 | 20 林崎遺跡 |
| 21 作野遺跡 | 22 河島山口遺跡 | 23 川口遺跡 | 24 古道遺跡 | 25 中山遺跡 |
| 26 小高根遺跡 | 27 宮の前遺跡 | 28 西海淵遺跡 | 29 鹿の沢遺跡 | 30 中村A遺跡 |
| 31 蟹沢遺跡 | 32 羽入遺跡 | 33 渡戸遺跡 | 34 上荒谷遺跡 | 35 石田遺跡 |
| 36 うぐいす沢遺跡 | 37 橋上遺跡 | 38 的場遺跡 | 39 御嶽神社遺跡 | 40 熊ノ前遺跡 |
| 41 坊屋敷遺跡 | 42 百々山遺跡 | 43 沼田遺跡 | 44 思い川A遺跡 | 45 思い川B遺跡 |
| 46 牧野遺跡 | 47 泥部遺跡 | 48 長岡山遺跡 | 49 石ヶ森遺跡 | 50 長者屋敷遺跡 |
| 51 竹井境B遺跡 | 52 花沢遺跡 | 53 台ノ上遺跡 | 54 朝篠遺跡 | 55 大森B遺跡 |
| 56 山居遺跡 | 57 西ノ前遺跡 | 58 小山崎遺跡 | | |

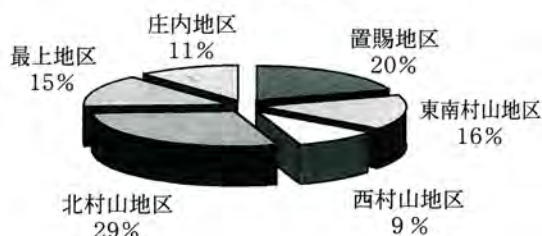
やまがたの主要な土偶出土遺跡

やまがたの土偶概要 (1)

(地域別土偶出土割合)

地 域	出土数	遺跡数
置 賜 地 区	139	17
東 南 村 山 地 区	115	15
西 村 山 地 区	67	10
北 村 山 地 区	203	22
最 上 地 区	110	7
庄 内 地 区	81	14
計	715	85

地域別出土割合



縄文後期の土偶は全県的に強い斉一性が見られるようになる。後期中葉の天童市渡戸遺跡や村山市川口遺跡などの例からは、再びたくさんの土偶が作られた様子が窺われ、渡戸遺跡に見るような出土状況が注目される。

一方、この時期の土偶には頭髮（ターバン状や戻り束ねなど）の形や腹部の文様（鋸歯状沈線紋）ほかに顕著な特徴が認められ、これらを通して相互の近縁性が即座に理解できるほどの強い類似性が東北一円でも指摘できる。また、蹲踞形などの所謂ポーズ形土偶もしばしば散見される。

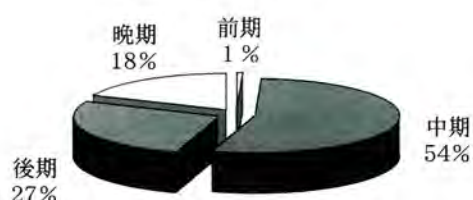
続く、縄文晩期には青森県・岩手県など北東北を中心とする亀ヶ岡系土偶の分布が県内各地に認められる。しかし、やまがたでは前葉段階の古いもの（大洞B・BC式）が極めて少なく、中葉以降のより新しい段階のもの（大洞C₂～A式期）が量的に凌駕する傾向が顕著である。後者は遮光器土偶といわれる土偶型式の流れを汲む一群で、遊佐町杉沢遺跡や羽黒町高森遺跡、真室川町釜淵

やまがたの土偶概要 (2)

(時期別土偶出土割合)

時 期	点 数
前 期	6
中 期	385
後 期	195
晩 期	129
計	715

時期別出土割合



遺跡、村山市宮の前遺跡、東根市蟹沢遺跡、寒河江市石田遺跡などにみるような優品も多い。

(2) 置賜の土偶

置賜地区では米沢市台ノ上遺跡をはじめとする17の遺跡から139点の土偶が知られている。台ノ上遺跡（中期前葉～中葉）では、100点以上もの土偶がまとまって見つかり、一つの遺跡から出土した数としては県内最多となっている。また、この地域の中期土偶には中部地方や北陸地方からの影響も窺われ、当時の文化的交流を探る上で注目される。

その他の土偶では縄文後期の米沢市竹井境B遺跡や高畠町石ヶ森遺跡の土偶がまとまりを持っており、この地域の後期土偶の様子をたどる上で欠かせない。なお、晩期土偶の状況は当該期の調査事例が少ないせいもあってか不詳な部分が多い。

(3) 村山の土偶

山形盆地や尾花沢盆地の山麓部を中心として展開する47の遺跡から現在までのところ385点の土

偶がみついている。これら遺跡の分布は、山形市を中心とする盆地の南東部や寒河江市を中心とする西南部、そして村山市や尾花沢市を中心とする北半部にそれぞれまとまりが認められる。

時期的には天童市上荒谷遺跡（前期前葉）、近年見つかった寒河江市高瀬山遺跡（前期後葉）や村山市宮の前遺跡例（縄文前期初頭？）が先行し、上山市牧野遺跡や同じく思い川遺跡例などがこれらに後続する中期前葉の土偶となる。また、時期別に見た数量の概略は、前期が7点、中期が161点、後期が120点、晩期が98点などの内訳で、中期が一番多く（42%）、次いで後期（31%）、晩期（25.5%）、前期（1.5%）の順であった。このことから、やまがたにおいて土偶が盛んに作られた時期は縄文時代の中でも中期や後期そして晩期だったことが明らかである。

（4）最上の土偶

最上郡舟形町西ノ前遺跡をはじめとして最上町水木田遺跡や水上遺跡などがこの地域での代表的な土偶出土遺跡である。これらの遺跡は小国川やその支流に沿って立地し、川から得られる鮭鱒などの自然の恵みが生活を支える大切な糧になっていたと推測される。群れなす鮭を短期間で集中的に捕えるには共同での作業が不可欠だったにちがいないと、近隣の村人が総出で力を合わせるようなことが想像される。西ノ前遺跡の日本一の大形土偶もまさにそうした背景の中でつくり出されたとも考えられよう。

また、西ノ前遺跡の上流に位置する最上町水木田遺跡は、向町（小国）盆地では中核となった縄文中期前葉～中葉にかけての一大集落跡であった。そこから見づかった水木田遺跡の土偶は、西ノ前土偶にやや先行する時期的特徴を備えており、西ノ前タイプといわれる土偶の変遷を考える上で重要な比較資料となる。

なお、今年度調査された新庄盆地のほぼ中央部、

泉田川右岸に位置する新庄市中河原遺跡からも多くの縄文中期前葉～中葉に属する西ノ前タイプ土偶が出土していることを付記しておこう。

（5）庄内の土偶

庄内では出羽山地の西麓に沿って分布する14遺跡から81点の土偶が見つまっている。日本海に沿う庄内地方は、その地理的環境から内陸部以上に南北文化の交流が顕著であった。また、この地域の縄文文化はそうした北と南の錯綜した在り方が以前から注目されてきたところでもある。

庄内で土偶が認められる時期は、今のところ縄文中期初頭からである。当該期は北陸や中部地方からの影響を強く受けた土器文化が庄内地域一円に広く分布していたと看取され、その様相は東北南部的な独自色の強かった内陸部とはかなり違っていたようである。例えば、平田町山谷新田遺跡や羽黒町玉川C遺跡、今年新たに見つかった小山崎遺跡E地点などの土偶は、そうした当時の北陸や中部地方からの影響を如実に反映した好例と判断される。

その他の土偶では中期前葉～中葉の鶴岡市岡山遺跡や中期末～後期初頭期の八幡町蕨台遺跡例などが注目される。特に後者の蕨台遺跡例は、柱実棒状の胴部に剃刀のような鋭利な施文具で描かれた極めて繊細な文様を加えられるものである。こうした類例は従来殆ど知られておらず、帰属時期等の判別に苦慮するところであるが、同時に出土した土器群から、山形県においては数少ない縄文中期末～後期初頭期に帰属するものであることが判明している。

（6）土偶の周辺

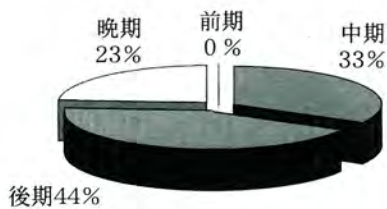
土偶の周辺には土偶との関係が深いと考えられるさまざまな土製品や石製品がある。軟質の石を加工して作った三角柱形石製品や同じく土製のもの。硬質頁岩ほかを素材とする三角（脚）形石器、あるいはイノシシ形を始めとする動物形土製品や硬

庄内の土偶概要

(時期別土偶出土割合)

時 期	点 数
前 期	0
中 期	27
後 期	35
晩 期	19
計	81

時期別出土割合

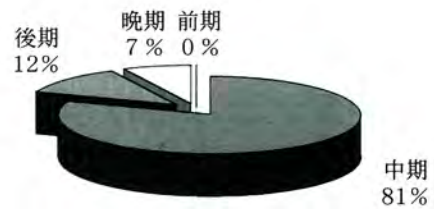


最上の土偶概要

(時期別土偶出土割合)

時 期	点 数
前 期	0
中 期	89
後 期	13
晩 期	8
計	110

時期別出土割合

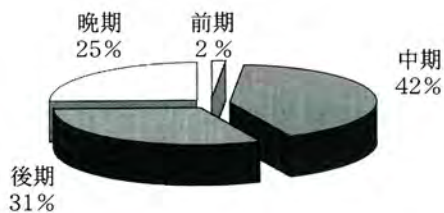


村山の土偶概要

(時期別土偶出土割合)

時 期	点 数
前 期	6
中 期	161
後 期	120
晩 期	98
計	385

時期別出土割合

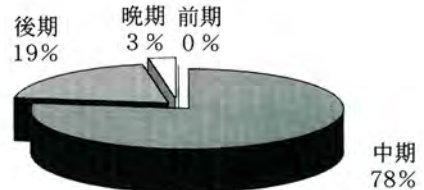


置賜の土偶概要

(時期別土偶出土割合)

時 期	点 数
前 期	0
中 期	108
後 期	27
晩 期	4
計	139

時期別出土割合



い石を打ち欠いて作った人形^{ひとがた}の岩偶および動物形の異形石器と呼ばれる一群などなどである。

今回の展示では上山市思川遺跡から出土した三角（脚）形土製品をはじめとして、県内各地の遺跡から出土した土偶関連と考えられる出土品の幾つかも展示した。人形や三角形に魅せられた縄文人の想いは何だったのか、土偶を取り巻く品々とその世界の拡がりがどのようなものだったのかを垣間見たいとする目的からである。

4 おわりに

今展示は、平成11年度最初の春の企画展として開催されたものであった。その間、遠足などで多くの子どもたちを始めとする来館者があり、一様に多くの土偶に驚き、また表情の多様さや縄文人の精神文化の奥深さに興味感心を示してくれたようである。

一方、ここで扱った土偶等資料は、年々の調査によって確実に増加しており、これまでは解らなかったことが新たな一つの資料の出現によって解明されるなどの事例も多い。本展示後に本館が発掘（第3次調査）した小山崎遺跡E地点の土偶なども庄内では最も古い土偶となり、当該域の前期末～中期初頭の土偶を探る上では格好の資料を提供した。すなわち、その形態から推測される出自系統は中部北陸的であり、胸の凹みなどは東北南部の前期末の特徴をもつ。また、現在整理中の村山市宮の前遺跡第3次調査で見つかった顔に凹みを持つ土偶は、不確実な部分もあるが前期初頭にまで遡る可能性があり、本県では天童市上荒谷遺跡出土土偶にやや先行する最古級の土偶となることが予想される。

このように、従来まで蓄積された資料にこれら新たな資料を加えて本県における土偶世界の展開を見直し、その上で再構築する必要性が痛感される。最古・最新（出現から消滅）の探究はもとより、出自系譜の問題、そしてその機能用途の問題など今後に残された課題は多い。最後に本県における土偶研究は未だその緒についたばかりであることを明記してこの展示報告を終えようと思う。

なお、文末ながら、開催にあたって貴重な資料の出品を快く承諾戴いた下記の関係機関ならびに関係各位に対して厚くお礼を申し上げる。

〈展示協力機関〉

米沢市教育委員会、高畠町教育委員会、天童市教育委員会、山形大学付属博物館、寒河江市教育委員会、朝日村教育委員会、大石田町教育委員会、尾花沢市教育委員会、遊佐町教育委員会、(財)致道博物館、(財)山形県埋蔵文化財センター、県教育庁文化財課、渡辺昇龍（尾花沢市）、熊谷松四郎（尾花沢市）、玉川寺（羽黒町）、まんぎり会（米沢市）以上、順不同、敬称略。

（補 記）

本論の巻末に今回の展示に関わる主な土偶の写真図版を掲載した。当初その配列は展示構成を配慮して地域毎と意図したが、種々の都合から帰属時期毎による特徴的な資料の配列に変更せざるを得なかった。また、晩期のものについては紙数の都合から割愛している。

なお、掲載資料の縮尺は任意であり、詳細については各報告書等を参照願いたい。

〈参考文献〉

No	編・著者名	発行年	書名	
1	遊佐町教育委員会	1971	神矢田遺跡第1次・第2次発掘調査報告書	
2	遊佐町教育委員会	1972	神矢田遺跡第3・4・5次発掘調査報告と考察	
3	致道博物館	1973	玉川遺跡 山形県羽黒町玉川遺跡第4次発掘調査報告(1)	
4	上山市教育委員会	1975	上山市牧野遺跡	
5	山形県教育委員会	1980	水上遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第27集
6	上山市教育委員会	1980	上山市思い川B遺跡発掘調査報告書	
7	金山町教育委員会	1981	本町遺跡発掘調査報告書	
8	山形県教育委員会	1981	山形市柏倉遺跡群発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第33集
9	山形県教育委員会	1981	思い川A遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第37集
10	山形県教育委員会	1981	水上遺跡第2次発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第40集
11	山形県教育委員会	1983	原の内A遺跡第2次発掘調査報告書	
12	山形県教育委員会	1983	中村A遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第73集
13	山形県教育委員会	1983	泥部遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第70集
14	山形県教育委員会	1984	作野遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第83集
15	大江町教育委員会	1984	橋上遺跡発掘調査報告書	大江町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
16	朝日村教育委員会	1984	砂川A遺跡発掘調査報告書	朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
17	米沢市教育委員会	1985	法将寺	米沢市埋蔵文化財調査報告書第12集
18	山形県教育委員会	1988	げんだい遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第128集
19	山形県教育委員会	1988	原の内A遺跡第3次発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第132集
20	山形県教育委員会	1990	川口遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第151集
21	山形県教育委員会	1991	山谷新田遺跡山海寮跡群発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第170集
22	山形県教育委員会	1992	山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
23	八重樫純樹編	1992	「土偶とその情報」	国立歴史民俗博物館研究報告第37集
24	山形県埋蔵文化財センター	1994	西ノ前遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第1集
25	山形県埋蔵文化財センター	1994	蔵台遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第5集
26	山形県埋蔵文化財センター	1995	宮の前遺跡第2次発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集
27	山形県立博物館	1995	特別展図録 古代人の原像—かお・手・あし—	
28	山形県埋蔵文化財センター	1996	渡戸遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第35集
29	山形県埋蔵文化財センター	1996	落合遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第36集
30	大石田町教育委員会	1996	分布調査報告書(5) ドザキ遺跡発掘調査報告書	大石田町埋蔵文化財調査報告書第8集
31	東京大学総合研究博物館	1996	東京大学総合博物館所蔵縄文時代土偶・その他土製品カタログ「増訂版」	
32	東北歴史資料館	1996	東北地方の土偶	
33	遠野市立博物館	1997	縄文の暮らしと精神文化	
34	大石田町教育委員会	1997	分布調査報告書(6)	大石田町埋蔵文化財調査報告書第9集
35	天童市教育委員会	1997	高野坊遺跡発掘調査報告書	天童市埋蔵文化財調査報告書第16集
36	米沢市教育委員会	1997	台ノ上遺跡発掘調査報告書	米沢市埋蔵文化財調査報告書第55集
37	山形県教育委員会	1998	分布調査報告書(25)・部小山崎遺跡発掘調査報告書(2)	山形県埋蔵文化財調査報告書第199集
38	山形県埋蔵文化財センター	1998	山居遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
39	土偶とその情報研究会編	1998	土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(2)	
40	山形県立博物館	1999	小山崎遺跡第2次発掘調査概報	

〈展示資料一覧〉

No.	市町村	遺跡名	点数	種類	時期
1	米沢市	台ノ上遺跡	87	土偶	中期
2	米沢市	竹井境A遺跡	6	土偶	後期
3	高畠町	石ヶ森遺跡	8	土偶	後期
4	高畠町	上平柳遺跡	3	土偶	後期
5	上山市	思い川A遺跡	40	土偶・三角形土製品	中期
6	上山市	泥部遺跡	10	土偶	後期
7	山形市	蔵王上野遺跡	1	土偶	中期
8	山形市	熊ノ前遺跡	2	土偶	中期
9	山形市	山形西高遺跡	4	土偶	中期
10	天童市	渡戸遺跡	15	土偶	後期
11	天童市	高野坊遺跡	1	土偶	後期
12	寒河江市	柴橋遺跡	2	三角形土製品	中期
13	寒河江市	高瀬山遺跡	5	土偶	前期
14	寒河江市	石田遺跡	2	土偶	晩期
15	西川町	山居遺跡	10	土偶	中期
16	村山市	宮の前遺跡	18	土偶・岩版ほか	晩期
17	村山市	作野遺跡	8	土偶・岩偶	晩期
18	村山市	川口遺跡	15	土偶	後期
19	村山市	西海渚遺跡	27	土偶・三角形土製品	中期
20	村山市	中村A遺跡	5	土偶	後期
21	村山市	落合遺跡	2	土偶	中期
22	尾花沢市	原の内A遺跡	20	土偶・三角柱形石製品	中期
23	尾花沢市	巾遺跡	2	土偶	中期
24	尾花沢市	漆坊遺跡	19	土偶	晩期
25	大石田町	イカゴの上遺跡	1	土偶	晩期
26	大石田町	ドザキ遺跡	5	土偶・三角形土製品	中期
27	舟形町	西ノ前遺跡	48	土偶	中期
28	最上町	げんだい遺跡	8	土偶	晩期
29	最上町	水上遺跡	1	土偶	後期
30	最上町	水木田遺跡	25	土偶・三角形土製品	中期
31	真室川町	釜渚遺跡	1	土偶レプリカ	晩期
32	朝日村	砂川A遺跡	11	土偶	後期
33	羽黒町	玉川A遺跡	1	土偶	後期
34	羽黒町	高森遺跡	1	土偶	晩期
35	鶴岡市	岡山遺跡	3	土偶	中期
36	平田町	山谷新田遺跡	3	土偶	中期
37	八幡町	蔵台遺跡	6	土偶	中期
38	遊佐町	杉沢遺跡	1	土偶レプリカ	晩期
39	遊佐町	小山崎遺跡	6	土偶	後期
40	遊佐町	神矢田遺跡	1	土偶	晩期

〈山形県土偶出土遺跡一覧〉

《置賜地区》							
No.	遺跡名	市町村名	時 期	点数	部 位	形態・特徴	文 献
1	法将寺	米沢市	中期	1	顔	両耳欠	市調報12 (S60)
2	大 檀	米沢市	前期～中期	1			県理報103 (S61)
3	台ノ上	米沢市	中期	100	顔・胴・脚		置賜考古1・3 (S45・47)
4	成 島	米沢市	中期	1			県史資料篇11 (S44)
5	李 山	米沢市	中期	1	体下半	妊婦	
6	竹井境B	米沢市	後期	5		妊婦、ハート形土偶	市八幡原調報3 (S52)
7	一本橋	米沢市	後期	1			
8	長岡山	南陽市	中期	1	胴	板状土偶	
9	大峯原	高畠町	中期	1	胴	妊婦	
10	石ヶ森	高畠町	後期	17	顔・胴・脚		町調報1 (S57)
11	上平柳	高畠町	中期～後期	3	胴		町史考古資料編 (S46)
12	金 谷	高畠町	後期	1	胴・脚		
13	長者屋敷	長井市	晩期	1	腕		市概報1～3 (S54～56)
14	萩生石箱	飯豊町	中期～後期	1	頭	逆三角形	町調報 (S55)
15	八幡台	白鷹町	前期～晩期	1			県史資料篇11 (S44)
16	石那田	白鷹町	中期	1			県史資料篇11 (S44)
17	朝 篠	小国町	晩期	2	胴・腕	中実	東北地建報告 (S45)
				小 計	139		139
《東南村山地区》							
No.	遺跡名	市町村名	時 期	点数	部 位	形態・特徴	文 献
1	思い川A	上山市	中期	5	胴・胸・脚	三角形土製品伴出	県埋報37 (S56)
2	思い川B	上山市	中期	3	胴・胸・腰	三角形土製品伴出	市調報第2号 (S56)
3	牧 野	上山市	中期	2	胸・脚	三角形土製品伴出	市調報 (S50)・山形考古3 (S33)
4	泥 部	上山市	後期～晩期	12	頭・胴・脚	腰袋模様	県埋報70 (S58)
5	沼 田	上山市	後期	2	胸・完形品	列点文	県史資料篇11 (S44)
6	百々山	山形市	中期	7	胴・脚	三角形土製品伴出	県史資料篇11 (S44)
7	熊の前	山形市	中期	23	頭・胴・脚	十字形土偶	県埋報16 (S54)・市調報 (S54)
8	蔵王上野	山形市	中期	1	下半身	立像	市史上巻第65図
9	蔵王半郷	山形市	中期	1	脚		
10	坊屋敷	山形市	後期	2	頭・脚	玉抱三叉文	県埋報33 (S53)
11	大森B	天童市	後期～晩期	4	頭・胸・腕		安孫子 (H5)
12	上荒谷	天童市	前期	1	完形品		県史資料篇11 (S44)
13	原 口	天童市	晩期	1			
14	渡 戸	天童市	後期～晩期	50	頭・胸・脚		山口 (S50)・県埋セン報35 (H8)
15	御嶽神社	中山町	晩期	1			町史
				小 計	115		115
《西村山地区》							
No.	遺跡名	市町村名	時 期	点数	部 位	形態・特徴	文 献
1	石 田	寒河江市	晩期	5	頭・胸	X字土偶 (1)	西村山地域史の研究1
2	うぐい沢	寒河江市	中期	1	胴		県埋報41 (S56)
3	柴 橋	寒河江市	中期	1	顔		
4	高瀬山	寒河江市	前期	5	胸	胸に凹	
5	お月山	河北町	中期	1	頭	逆三角形	河北町の原始文化 (S32)
6	花ノ木	河北町	晩期	3	頭・胴		河北町の原始文化 (S32)
7	的 場	西川町	晩期	6	肩・胴・足		県埋報14 (S53)
8	山 居	西川町	中期	31	頭・胸・腕	板状土偶・中空土偶	県埋文セン報 (H10)
9	松 原	朝日町	中期	1	胸		
10	橋 上	大江町	中期～後期	13	頭・胸・脚		町調報 (S59)
				小 計	67		67

《北村山地区》

No.	遺跡名	市町村名	時 期	点数	部 位	形態・特徴	文 献
1	落 合	村山市	中期	8	頭・体・脚		市史別巻1 (S57)
2	作 野	村山市	後期～晩期	13	頭・胸・脚	海獣形土製品伴出	県埋報83 (S59)
3	中村A	村山市	中期～後期	12	頭・手・足	ターバン形頭部	県埋報73 (S58)
4	中 山	村山市	中期	1	上半身	立像	県埋報9 (S51)
5	林 崎	村山市	晩期	1	上半身	中空	市史別巻1 (S57)
6	古 道	村山市	中期	2	上半身・脚	分銅形	県埋報9 (S51)
7	湯沢ハバ	村山市	晩期	1	顔	仮面か	市史別巻1 (S57)
8	鹿の子沢	村山市	中期	3	頭・上半身		市史別巻1 (S57)
9	西海淵	村山市	中期	35	頭・胸・足		市史別巻1 (S57) 他
10	岩 倉	村山市	中期	1	胸	板状	市史別巻1 (S57)
11	小高根	村山市	中期	1	頭		史別巻1 (S57)
12	宮の前	村山市	晩期	41	頭・胸・脚		県埋文セン報19 (H7)
13	川 口	村山市	後期	24	頭・胸・脚	イノシシ形土製品伴出	市史別巻1 (S57)
14	河島山口	村山市	後期	1	胴	妊婦	史別巻1 (S57)
15	蟹 沢	東根市	晩期	6	頭・上半身	動物形土製品伴出	日本考古学年報13 (S40)
16	羽 入	東根市	中期	1	胸	板状	市史別巻 (S58)
17	漆 坊	尾花沢市	後期～晩期	19	頭・下半身		市調報2 (S57)
18	巾	尾花沢市	中期	2	頭	中空 (1)	市調報4 (S59)
19	原の内A	尾花沢市	中期	24	頭・上半身・足	完形品 (2)	県埋報36・71 (S56・58)
20	来迎寺	尾花沢市	中期	1	頭	広顔	県埋報34 (S56)
21	ドザキ	大石田町	中期	5	頭・胴・足	三角形土製品伴出 (1)	町調報8 (H8)
22	イカゴの上	大石田町	晩期	1	上半身	結髪	町調報9 (H9)

小 計 203

203

《最上地区》

No.	遺跡名	市町村名	時 期	点数	部 位	形態・特徴	文 献
1	下野明	金山町	中期	2	胴・脚	立像・爪形文	町教委調査 (S33)
2	本 町	金山町	中期	2	胴・脚	沈線文	町調報 (S56)
3	げんだい	最上町	後期～晩期	7	頭・胸・脚	刺突文	県埋報129 (S63)
4	水木田	最上町	中期	37	頭・胸・脚	立像、西ノ前タイプ	県埋報75 (S59)
5	水 上	最上町	後期	13	頭・胸・脚	刺突文	県埋報27・40 (S55・56)
6	材 木	最上町	晩期	1			町教委調査 (S60)
7	西ノ前	舟形町	中期	48	頭・胸・脚	完形土偶含む	県埋文セン報1 (H6)

小 計 110

110

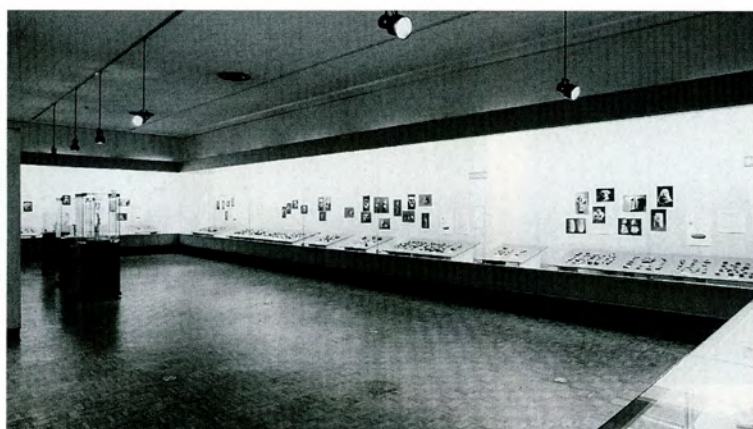
《庄内地区》

No.	遺跡名	市町村名	時 期	点数	部 位	形態・特徴	文 献
1	岡 山	鶴岡市	中期	5	頭・胴・脚		県調報18 (S47)
2	玉川C	羽黒町	中期～晩期	7	頭・胸・肩	ポーズ土偶	「玉川遺跡」1 (S48)
3	玉川A	羽黒町	中期	2	下半身		羽黒町史 (H3)
4	高 森	羽黒町	晩期	1	頭	結髪土偶	羽黒町史 (H3)
5	伊勢林	羽黒町	晩期	1	頭		羽黒町史 (H3)
6	東興野	立川町	中期	4	胴	妊婦	県埋報44 (S56)
7	砂川A	朝日村	後期～晩期	28	頭・胴・足		町調報2 (S59)
8	神矢田	遊佐町	中期～晩期	15	頭・胸・肩・脚		町調報 (S46・47)
9	杉 沢	遊佐町	晩期	2	中空	ほぼ完形品	考古学雑誌39-3/4 (S30)
10	金 俣	遊佐町	後期	1			
11	小山崎	遊佐町	後期	5	頭・胸・下半身	イノシシ形土製品伴出	
12	相 沢	平田町	後期～晩期	1	胸		漁火16 (S41)
13	山谷新田	平田町	中期	3	上半身・腹部	大木・北陸系土偶	県埋報170 (H3)
14	蕨 台	八幡町	中期	6	胴部	金田タイプ土偶	県埋文セン

小 計 81

67

図版 1



全体展示状況



展示会場入口



村山の土偶展示状況

図版 2



高瀬山遺跡 (I)



高瀬山遺跡 (I)



高瀬山遺跡 (I)



小山崎遺跡

図版 3



山谷新田遺跡



山谷新田遺跡



玉川C遺跡

図版 4



台ノ上遺跡

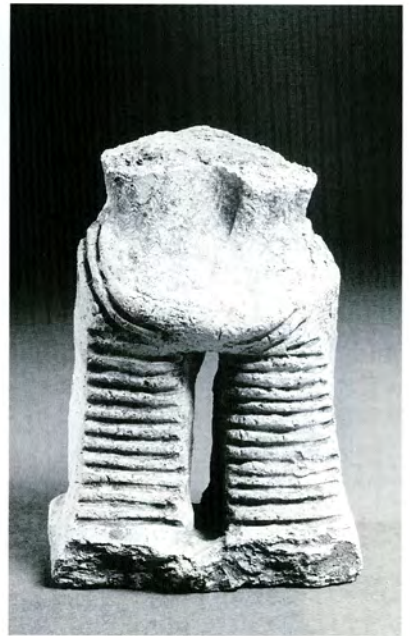


台ノ上遺跡



蔵王上野遺跡

図版 5



玉川遺跡群



玉川遺跡群

中期前葉の土偶

図版 6



台ノ上遺跡



水木田遺跡



巾遺跡



ドザキ遺跡



ドザキ遺跡

図版7



台ノ上遺跡



台ノ上遺跡



台ノ上遺跡



台ノ上遺跡



台ノ上遺跡

中期中葉の土偶

図版 8



岡山遺跡



西海渚遺跡



落合遺跡



山居遺跡

図版 9



山形西高敷地内遺跡



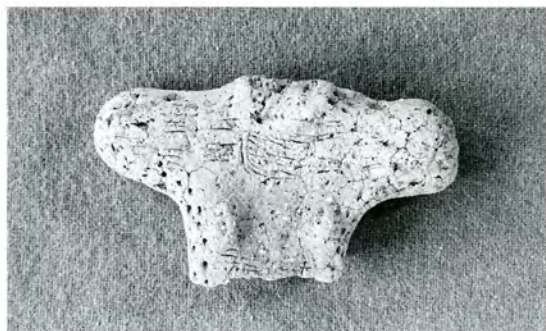
山形西高敷地内遺跡



蔵台遺跡

中期末葉～後期初頭の土偶

図版10



蕨台遺跡



蕨台遺跡



蕨台遺跡

中期末葉～後期初頭の土偶

図版11



渡戸遺跡



渡戸遺跡



渡戸遺跡



小山崎遺跡



中村A遺跡

後期中葉の土偶

図版12



渡戸遺跡



水上遺跡



小山崎遺跡



高野坊遺跡



坊屋敷遺跡

隊茂統而相進候処、何方共不相分砲声相聞候二付、覚悟致し居候処、意外之山溪り烈敷鳥銃打懸られ候故、各隊致狼狽、暫時砲戦二及候得共、朋崩れと相成、終二若宮与申込迄落行候処、最早尾撃茂無之候二付、散乱之人数相纏メ引取候途中、山中静翁小笠原馬上二而福島島り驅来、清水町寺院二諸勢引留、是り守返し候様被申候得共、いづれも勞兵之旨申述、一同福島駅江引揚申候、右散乱之節、戦士矢口鐘次郎砲疵二而死亡仕、并大砲一門取残し申候、其後福島駅并同郡大森込迄、番兵・巡邏等致し居候処、九月九日米沢藩坂蘭溪諸藩相招申聞候二者、是迄官軍二対し戦争致し候段心得違、恐入候趣委詳物語、早々解兵謝罪之儀、厚く申聞候間恐入、上ノ山藩与申談、会議所江断置、同十一日福島駅出立、山形表二引取申候儀二御座候

7 庄内出兵

一九月廿一日夜、薩州會計方西徳次郎殿、参謀黒田了介殿之命を伝、莊内御征討先鋒被仰付、四小隊・一砲門、水野雅樂介

引率出張可仕旨御達有之候二付、翌廿二日巳ノ刻、隊長大場勘左衛門隊廿五人、銃頭鈴木齋隊廿五人・岡本勇記隊廿五人・新兵隊四十人、一砲門、砲手十一人、其余諸吏共、総司水野雅樂之助引率出張、尾花沢駅江宿陣仕候処、雅樂之助儀俄二病発仕候二付、代之者差越候様、山形表江申遣置、兵隊者隊長大場勘左衛門引率仕、同廿七日清川宿迄操込候処、尚又鶴ヶ岡城下迄進入可致旨、西徳次郎殿より差図有之候二付、城下江操込宿陣仕候、然処翌廿八日夜、黒田了介殿より、莊内降伏謝罪御聞届相成候二付、明後朔日より解兵仕候様、刻付廻状到来二付、十月二日同所引揚申候、前条水野雅樂之助不快二付、右為代総司二本松大炊、去ル廿七日山形表出足、十月二日清川宿迄罷越候処、兵隊引戻三出合、御達之趣伝承仕候間、同所より兵隊引率、同六日山形表引取申候

註1 出兵先題名は筆者

註2 出兵人数中に諸吏と出てくるが、當時

我藩総動員計画（上山市史編集資料集No.22）をみると、旗

持・鼓手・医師・薬籠持・記録方・会計方・

兵糧方・彈藥方・使番・陣場奉行などが出て

くる。諸吏とはいっていないが、これらと思う。
註3 行衛不明は全員戦死と考えられる。

あとがき

戊辰の役から既に百三十年。昨年四月旧水野藩士族子孫有志を会員とする「香澄俱樂部」と「霞城祭実行委員会」が主催、「山形商工会議所」「豊烈神社」の後援を得て、『明治維新殉難者頌徳祭』が行われ、水野家十六代当主、遺族、また、市長始め来賓、および会員等多数参列、厳肅盛大に行われた。

今回の研究報告では、戦闘そのものの資料を紹介しようと考えたが、その前提として、水野藩の置かれている状態、また「戦況報告書の作成過程」を吞み込んだうえで資料読み取りが必要と考え、自分なりに書いてみた。読み取りに誤りがあるかも知れない。資料の大部分が三郎右衛門家であり感謝にたえないが、他の資料の提供をお願いすること切なるものがある。例えば少量であつても。

前記引用資料関係機関、並に各位の御厚情に感謝し、また御批正をお願いしたい。（かわせひとし 山形県立博物館専門嘱託）

郎右衛門隊夜襲有之候二付、中村辰次郎隊・松野尾政右衛門隊応援として、途中迄操出候処、戦争相果引揚来候、同辰ノ刻より庄藩二番隊、再同所江進軍二付、井上宇兵衛隊・忽砲一門、庄藩大砲隊二連合、正面二向ひ砲戦、一ノ関藩一小隊応援として来ル、中村辰次郎隊・松野尾政右衛門隊、庄藩銃頭寺内権藏隊・歩兵頭山内三吉隊二小隊合兵、左之山手ニ相廻り候処、未ノ上刻、敵遂ニ宿営を自焼し敗走二付、荻和野橋迄各藩共ニ尾撃、其節、戦士矢倉太兵衛敵老人打留候処、庄藩山田元治首級を揚、銃并胴乱者分捕仕候、戦士木崎綱馬浅手負、同所江宿陣仕候

一同日水野藤五隊者、上淀川宿川手前江押として罷越候処、同夜亥ノ刻、敵軍川向より俄ニ小銃打放いたし候二付、応援二三発候得共、為差戦争ニも不相成候、止戦後庄藩銃頭相良惣右衛門・大砲隊応援として来ル、翌天明斥候之者差出、探索仕候得共、敵老人も無之候

一同十二日芦沢村二番兵、同十四日上淀川宿川手前江転陣番兵仕候

一同十五日午ノ刻より上淀川宿ニ而、庄藩侯野市(郎)右衛門引率致し酒田組戦争有之、其節弊藩人数者山ノ手江番兵罷在候処、敵軍不意ニ荻和野宿ニ戦仕懸、一ノ関藩人数大敗之趣、未ノ刻比注進有之、庄藩二番隊操出し候二付、弊藩忽砲一門附屬終夜戦争有之、右為応援出兵之義、子ノ刻頃申来候間、番兵引揚、峯吉川村江着陣仕候

一同十六日辰ノ刻、荻和野宿江庄藩二番隊進軍二付、弊藩二小隊^{長陣二付、病人多ニ相成候間、小隊二相成申候}左ノ山岸より横合江打砲、其節松野尾政右衛門隊銃卒中駒吉深手負仕候、申ノ刻敵軍敗走、各藩尾撃、其節水野藤五(隊)銃卒平林林平敵老人討取申候、峯吉川村江歸陣之処、在所山形表より早追之者到着、此度謝罪歎願書差出候二付、早々人数引揚候様申来候間、即剋峯吉川村引揚、十七日横手駅宿陣、十八日湯沢宿迄退陣之処、及位宿込迄、官軍追々御進軍相成候哉ニ風説有之、此上押而本道通行、如何様之儀出来候而茂不宜与相心得、男安閑道より仙台江相越、其節、大砲一門、小銃其外彈藥等致宰領(候)器械方宮本熊太郎、

夫卒四人、跡江相後れ行方相知不申、九月廿九日山形江歸陣仕候

6 福島方面出兵

一八月初旬、南方切迫二付、国境を固メ候心得ニ而人数差出候様、米沢藩井上ノ山藩等より催促有之候間、同五日隊長二本松小次郎隊二十一人、銃頭剣持豊太郎隊二十人、大砲一門、砲手八人、其外諸吏共、総司鈴木森右衛門引率、仙台領峠田駅迄罷越候処、米沢藩片山甚一郎立寄、山形・上ノ山両隊者福島城下迄操込可申旨、白石會議所において相極り候段申聞、其内白石會議所も同様申来候間、同十五日右福島駅江操込申候、然処、同所會議所ニ而、仙藩申聞候二者、二本松表迄各藩一同進軍可致旨、就而者、一番手二本松隊、二番手^{仙台集議隊、三番手同飛行隊、此隊之左右より山形・上ノ山両隊応援として相進候様との事ニ而米沢隊ハ大森、依之翌十六日一同黄昏より出発、翌十七日巳ノ刻比与相覚、二本柳迄相進候処、右四藩之内、二本松隊者同所本道より前進、仙台隊者裏手閑道より相進候儀ニ而、山形・上ノ山}

早新庄者開城、老人も無之、庄藩操込居申候、折柄猝二烈風二相成、城中江吹付候二付、火勢弥烈敷候間、城外二操出候処火勢相延、夜二入候頃二ハ、城中一円之猛火二相成申候二付、福田村二引退宿陣、同夜井上宇兵衛隊者猿羽根峠二番兵、翌十五日新庄領西山与申処二面合隊二相成、宿陣仕候

一 同十六日金山駅二操込、同十九日迄、同所二番兵、同廿日下中田村二操込、廿四日迄番兵仕候

一 同廿五日卯ノ上刻操出し、庄藩一番隊銃頭陶山臼兵衛・石川猪太夫隊二附属、本道塩根坂二向、庄藩・弊藩・上ノ山藩大砲三門、正面り致砲戦候内、弊藩十六人・庄藩廿人、字ピリ沢与申処り山二攀上り、峯伝ひ、山上り呐喊連発、折柄庄藩二番隊、閑道漆野村り八式台村打破り、及位駅二討出候二付、巳ノ中刻敵勢敗走候間、及位駅迄操込、同廿六日中田村江退、休息仕候

一 同廿七日田代村江操出し、廿八日天明り秋田境本道雄勝峠、閑道銀山黒森江、仙・庄・米・上ノ山藩進撃候節、弊藩忽砲一

門本道江相廻し、兵隊者矢嶋口番兵二相残、鏡沢村江八月三日迄宿陣仕候

一 同四日院内村^{以下}江転陣、七日下午小真木村宿陣仕候処、翌八日辰ノ下刻、水無瀬川向志戸村り、庄藩二番隊宿陣所下角間村二面、敵勢砲発致し候二付、井上宇兵衛隊者小梁木村川端二布列候処、敵勢不意二

正面之土手二相頭、烈敷打立候二付、戦士柴田勝右衛門討死、終二操引二致し、小真木村迄引退候処、入替而庄藩銃頭上田伝十郎隊盛返し戦争候中、庄藩本道二向候一番隊銃頭石原藤助応援として来、敵之後二相廻り、柳原村放火二付、敵勢引退申候間、同夜下角間村江移陣仕候

一 同九日所々戦争、終日大小砲之音烈敷候得共、弊藩人数者手合無之、浅舞村二操込、同十日迄番兵仕候

一 同十一日深間内村二宿陣、翌十二日田村新町二番兵仕候

一 同十三日角間川村二面、仙藩戦争相始候処、追々被打縮引退候様子二付、庄藩二番隊銃頭酒井次郎右衛門・水野郷右衛門隊・弊藩水野藤五隊操出し候処、敵、庄藩之旗之手を見候与、直様崩立引去候二

付、為差戦争茂無之、角間川打越藤木村り歸陣、田村新町江番兵仕候

一 同十四日角間川村江操込候処、午時川向り敵軍烈敷放発二付防戦、兵糧方西村嘉六手負仕候、井上宇兵衛隊・庄藩一小隊与合兵、川上を渡り横合り討入、間茂無之、未ノ刻敵退去候二付、大保村迄進軍止戦候処、敵喇叭を吹大小砲打立盛返し候勢二付、又候進撃追分三至り、薄暮角間川村二歸陣仕候

一 同十五日飯田村江操込、同廿六日迄宿陣仕り、内十七日仙台江落行候銃頭松野尾政右衛門隊国元り到着、同廿三日未ノ中刻り花立村大曲駅二面、庄藩一番隊戦争終夜烈敷候、其節弊藩人数者川ノ目村番兵仕候

一 九月七日中村辰次郎隊、松野尾政右衛門隊大沢村江操込、井上宇兵衛隊、水野藤五隊者湯ノ沢村江操込、夫り中村江転陣候処、同十日夜巡邏之砌、不審之者三人取押委細相糺候処、島原藩渡辺百左衛門・小川登八郎・夫卒老人之趣申立候二付、庄藩二番隊酒井吉之丞陣所江引渡申候

一 同十一日暁、荏和野宿江庄藩銃頭酒井次

一 同 七日新庄城下江操込、同八日金山宿

以下
新庄領

宿陣之積^二而申ノ上剋操込候処、仙

藩總督梁川播磨^カ致差図候者、黒森閑道

(為)押、仙藩警手山一小隊差出候^二付、

弊藩兵隊栃木村江操込候様申聞候^二付、

同村迄夜中操込候処、仙藩警手山人数不

操込由^二付、稲沢村江引戻宿陣仕候、其

節仙藩茂木新九郎、監察として隊中^二加

居申候

一 翌九日早朝、米藩上與七郎来り、本有屋

村^二最早仙藩警手山永根権太夫隊操込候

二付、弊藩一小隊者同村^二、跡一小隊者栃

木村辺江操込、問道之押急度持呉候様申

聞候^二付、本有屋村・栃木両村江宿陣仕候

一同十一日辰中刻、及位村^二当り火之手見

候得共、砲声一向^二不相聞候^二付不審^二存

斥候差出候内、栃木村三丁程隔候下向村

ら、敵勢急二開を揚小銃打懸候^二付、不

意之事故、本有屋村^二宿陣致し居候松野

尾政右衛門隊、栃木村宿陣之中村辰次郎

隊^二与相隔居、救心之暇も無之、各々戦争、

其節松野尾政右衛門銃卒岩堀亀吉敵壺人

打留、得首級、銃并胴乱分捕仕候、次第

(二苦戦、)差図役豊島彦太郎討死、終^二

散乱、仙台領江落行申候、中村辰次郎隊

者金山迄引揚、両村^二大砲一門其外器械

等打捨来申候、其節戦士川越祐^二、夫卒

壺人討死、戦士水野馬太郎・斎藤悦太郎・

加藤辰次郎手負、兵糧方加藤庄助・朝倉

三郎平行衛不相知、金山^二敗兵相纏メ

候処、仙藩熊谷平吉隊応援^二来り、稲沢

村迄操出候処、宮村^二発砲致し候^二付、

暫時撒隊^二而防戦交綏し、夫^二舟形駛迄

引揚候積^二而、新庄城下南方入口迄退来

候処、莊藩酒井吉之丞引卒致し候^二番隊

二行逢被引留、鳥越村江宿陣

一 翌十二日粮米無之旨^二付、莊藩舟形駛迄

引退、弊藩敗兵十六人同様宿陣仕候、其

節総司二本松七郎病氣^二付、帰国仕候

一同十一日二番手隊長井上宇兵衛隊三十四

人、銃頭水野藤五隊三十三人、忽砲一門・

手天砲一位、砲手十一人、其外諸吏共操

出候節、二本松七郎病氣之趣申越候^二付、

同人代として、水野文平太引率、山形表

出発仕候

一同十三日辰ノ中刻、敵軍川向四ツ谷之山

ら小銃打放、河原^二大砲打懸候^二付、杉

林之中^二陣取候処、午ノ中刻、庄藩酒井

次郎右衛門隊、長沢^二申処^二川を渡り、

山際^二添、横合^二打懸、直^二短兵接戦^二相

成候^二付、莊藩宮坂顕蔵来り、弊藩人数

も河原^二操下し、進撃致し呉候様申聞候

二付、河原^二於て二三発打放、夫^二川を

渉、庄藩^二打交り本道進撃四ツ谷^二至、

其節銃卒小池源之助手負仕候(後死)、右

戦争相済候後、弊藩^二番手之内、井上宇

兵衛、銃頭水野藤五隊、忽砲一門、手天

砲一位、庄藩松平甚三郎引率致し候^二番

隊^二附属、舟形駛^二着到、総司水野文平

太、井上宇兵衛隊、其外諸吏共、尾花沢

駅^二大石田村番兵^二罷越申候

一同十四日中村辰次郎隊・水野藤五隊・莊

藩銃頭水野郷右衛門・寺内権蔵隊^二附属

し、天明進発、午時清水駅^二進、兵糧相

用候処、本道鳥越村・山手角沢村両所^二

而、大小砲声夥數相聞候^二付、午ノ中刻

福田村迄相進、銃隊^二新庄城下^二八丁程

隔候^二升形村^二おひて、新庄勢^二打合、大

砲^二仁間村^二右城下^二江打込候中、未ノ中

刻、莊藩右城下^二潜り入、両^二ヶ処^二江放火

候^二付、追々敵勢引色相見候間、升形村

二討入放火、夫^二右城下^二江操込候処、最

候処、黄昏ニ相成候間、同郡戸口村江宿陣、番兵罷在、翌廿九日同郡帶織村ヲ指出村探索之儀、米・会之両藩ヲ申来、拂曉、右両藩人数ヲ合併、指出村ニ進軍候処、不計敵兵村中木立之処江胸壁を構江、頻ニ発砲候ニ付、米会諸共左右ニ布列、朝辰ノ半刻頃ハ互ニ発砲、午ノ半刻頃ニ至リ死傷之者出来、彈藥も尽、旁以小人人数、殆ど及苦戦候間、一ト先戸口村迄引揚候処、尾撃之形勢ニ付、猶又同郡加茂駅本陣迄、一同引揚申候、其節、弊藩死傷左之通ニ御座候

戦士

松崎 主計

夫卒 壹人

右死

隊長

雄倉 源右衛門

半隊司令士

呼子 仲次郎

戦士

安田 郁藏

右傷

一六月二日再度同郡大面村迄出陣、金龍寺

山江番兵罷在候処、同六日見附宿江陣替ニ而同郡方所村番兵罷在、同十四日大砲一門、米藩大砲ヲ組合、同郡ナカコ谷村胸壁江押出し、打放致し候処、車輪損し候ニ付引揚申候

一 去月廿九日指出村戦争之節、死傷茂有之、人数も不足ニ相成、且米藩も、二番手出張候様、度々催促ニ付、在所表江申遣候処、兵隊五拾人其外諸吏、同十五日見附宿陣所江到着仕候、同十六日同郡中ノ嶋村江陣替番兵罷在、同廿九日又候見付宿江陣替、七月三日同郡百束村番兵罷在候

一 総司大道寺源内、兼而持病ニ而進退不便之趣申越候ニ付、在所表江総司拝郷族同八日到着致し候、然候処、新庄表ニ於ても戦争相始り、山形表ハ兵隊操出し、甚手薄之趣報知有之候ニ付、米藩本陣江相断、兵隊二十人其外諸吏残置、其余大砲迄引揚、大道寺源内引率、同十七日越後表出立、同廿四日山形表江帰着、守衛罷在候一右残之兵隊拝郷族引率、猶亦米藩与合兵、百束村番兵罷在候、同廿五日諸藩長岡江進撃、所々放火之節、弊藩者於胸壁互ニ

発砲、其俣右百束村江同廿七日迄番兵罷在候、同廿八日同郡長呂村江転し番兵罷在候処、同廿九日巳ノ刻比ハ長岡之方ニ当リ、処々火ノ手揚、次第ニ烈ク、午ノ刻頃諸藩潰敗之体ニ相見ヘ、未ノ刻頃砲声次第ニ間近ク相成、近隣之村落火ノ手揚リ、宿陣江相迫り候間、見附宿江一ト先引揚、米藩江申談示八十里越ハ人数不残引揚、八月十二日山形表江帰着仕候

5 新莊・秋田方面戦闘

一 六月廿九日仙台応接所ニ於て、同家重役申聞候趣、此度秋田侯叛盟顯然ニ付、羽州各藩兵隊新庄表迄操出し候ニ付、弊藩ニも同様秋田口出兵有之候様申聞、且米沢藩も、当時越後口至急ニ付多人数難差出、秋田口者当分弊藩・上ノ山・天童ニ而出兵、防禦致し呉候様申聞候ニ付、不得止、七月五日隊長中村辰次郎隊二十人銃頭松野尾政右衛門隊二十四人、忽礮一門、砲手十人、其外諸吏共、総司二本松七郎引率出張仕候得共、弊藩出兵人数寡少之旨、諸藩批判候ニ付、猶二番手操出し候積ニ而出陣仕候

太夫等申聞候間、次第を以操引二いたし候処、賊者川二添慕来候二付、弊藩二面後

殿いたし候様、右兩人申聞候間、撒兵二布列砲戦及び、慥二賊五・六人打倒し、其余死傷多分可有之候得共、川向之事故首級を得兼申(候)、弊藩死傷者其砌御届申上候通二御座候、然処左沢江残り居候薩長兩藩応援到着、川を隔て南北江進撃、守返し候様申聞候間、同藩江合し、左右より狭撃及戦争候処、賊遂三敗走散乱いたし候二付、賊之宿陣水沢村放火及び、各隊凱歌を唱、沼山村江引取宿陣仕候

銃頭

小林 栄

司令士

高宮 猪兵衛

雄倉源右衛門隊

銃卒

柘植 中蔵

永井 熊次郎

鳥居 吉次郎

右死

戦士

高山 郡太

右傷

寺林 太左衛門

一 翌十二日賊之本陣本道寺江薩長先鋒進撃候処、是亦賊遁逃、六十里越江引取候趣二付、同寺放火及び海味村迄揚取候処、参謀大山格之助殿同所江出張二面、弊藩兵隊者白岩村要地二抛り相固メ可申旨達二付、同所口々間道迄番兵差出宿陣罷在候

一 同廿三日八聖山相固メ候上ノ山藩、人数引揚候旨案内有之候間、事実為問合斥候之者差遣候処、最早兵隊者人茂不居合候二付、猶又探索いたし候処、米仙之兵隊多人数上ノ山城下并笹谷辺迄押来り、依之山形城下危急之趣報知候間、其段参謀大山格之助殿江相届、先ツ一旦人数引揚御差図相待居候儀二御座候

○ 同廿四日最前新庄へ出兵之老番手友松弥五左衛門手、当八日白岩辺へ出兵雄倉源右衛門手一同、入間村戦争後迄白岩宿陣之処、今曉追々引揚帰陣二相成ル(要)

4 越後方面戦闘

一 閏四月廿七日仙藩・米藩之勢、凡三大隊程山形城下江繰込、奥羽鎮撫副総督府沢

様為御守衛、米藩出張之旨以使者申聞、弊藩為応援出兵候様談示有之候二付、隊

長雄倉源右衛門隊式拾壹人、銃頭大場勘左衛門隊三拾人、大砲一門、砲手九人、其外諸吏共、総司大道寺源内引率、五月朔日山形出立、桶岡宿迄到着候処、尚新庄表迄可相越旨申来、同所迄繰込候処、沢様二者新庄表御出立、秋田表江御転陣二相成候間、最早不及御守衛旨申来候由二付、兵隊何れも引揚候様二との事二面、同七日新庄表出立、米藩同行、同九日山形表江帰着、即日越後表戦争相始り候二付、米沢城下迄為応援出兵候様尚又申聞候間、無余義、新庄表三出張之兵隊其俣、右同人引率、同十日兵隊操出し、米沢城下迄罷越候処、越後口切迫之模様二付、俱二操出し候様談示有之、則越後表江兵隊操出し、同廿七日越後蒲原郡吉野谷村二到着、番兵罷在、翌廿八日同郡見附宿切迫二相成候間、遊軍として相進候様、米藩江談示を受候二付、米藩と供二相進候途中、斥候之者報知二依而行軍を整へ、本道者米藩、左之山手者会藩、右之村々者山形与三路二分り、尤大砲一門米藩大砲与組合進軍

之候得共、其員睨^と不相分、何分寡兵之弊藩、賊^者大勢陸續進來、殊^二何れより之応援兵^茂無之、追々死傷^茂有之、衆寡難敵、乍敗走操引^二揚取候之処、賊兵^茂不致尾撃退散いたし候、則於^二両所死傷者、先達御届申上候通御座候

隊長

大久保 傳 平

司令士

赤 星 守 人

戦士

松 崎 竹四郎

大砲方

加 藤 雅 藏

原 田 喜平太

稲 葉 半兵衛

前 田 庄 助

右死

戦士

築 井 健九郎

輜重方

岩 永 郷太郎

稲垣 道右衛門

醫師

中 根 宗 信

右傷

手負即死

夫卒 一人

一右之後、北方所々^二而頻り^二銃砲声相響、且兵燹之形勢^二付、斥候等差出置、引揚候兵隊領分内表村^二而人数相纏居候処、賊諸口々^二而戦争、同時天童江攻撃いたし、既^二陣屋^并市中等へ放火、猶諸々江襲来候形勢不容易候旨報知有之候^二付、一ト先城内迄、午刻過引揚、三ノ丸口々^并町端口々敵重^二守衛仕候

3 入間方面戦闘Ⅱ一・三番隊

一閏四月四日莊内勢、六十里越り羽州村山郡江襲来之趣^二付、(一番隊)早々彼地江転陣可致、尤是迄^者応援出兵之処、以来薩長両藩江併合、先鋒進軍候様御達有之、尚右両藩^り両人も弊藩隊中江加り、同所即日転陣仕、途中横山村^並同州長瀨陣屋等江、莊内勢屯集之趣、薩藩隊長和田五左衛門・長藩隊長桂太郎軍議之上、三藩各分隊^二而、本道・間道^与両道^り相進、同八日長瀨陣屋江三面^り取巻探索候之処、

敏^二賊退散^二付、右陣屋薩長藩^二而放火いたし、横山村^茂賊退散^二付、両道^り進軍、一手^者天童着陣之処、山形より為応援、筑藩二小隊程、并弊藩三番手戦士隊廿三人、銃頭鈴木桶雄隊二十四人、大砲一門・砲手七人、其外諸吏共、隊長雄倉源右衛門引率着陣仕候

一同十日各藩軍議之上左沢江進入、間道之兵隊^茂到着候処、賊悉ク退散^二付、宿陣仕候

一同十一日薩長藩^者同州左沢取締として相残、筑藩并弊藩一同沼山村迄進軍候処、莊内勢本道寺江多勢屯集、本陣相構罷在候趣報知^二付、軍議之上、已半刻頃より進軍候処、賊^者白岩川を隔、北ノ方水沢村辺迄進來、山岳樹林等を便り相備候^二付、筑藩二小隊・大砲一門、弊藩四小隊大砲二門を以て砲戦、追々打縮め、入間村迄進撃候得共、地利不便、彼ハ高より低を臨ミ、山岳樹林を楯とし、味方ハ平地遮蔽之物無之難戦^二及び、且湯殿山より流末之白岩川を隔て、其砌連雨水漲可押渡様無之、日^茂西山^二傾候間、一ト先揚取候様、長藩戸倉乙五郎・筑藩貝原一

2 落合・達磨寺戦闘^二一番隊

一 莊内御征討ニ付、応援一番手兵隊友松弥五左衛門引率、四月廿三日新庄表^江出兵仕候後、同廿四日二番手兵隊^茂支度次第、副総督府沢様為御警衛、新庄表迄出張候様、天童表ニおいて、参謀大山格之助殿より御達有之、則三小隊・二砲門、隊長大久保傳平隊廿三人、銃頭鈴木楯雄隊五十六人、砲手十二人、其外諸吏共、総司水野三郎右衛門引率、同廿六日出兵、天童宿陣之處、莊内賊六十里越^与唱候山路を打越相追候旨、天童藩より報知有之、仍而談判之上、一先ッ弊藩領分長町村迄引揚、形情及探索候処、賊兵^者、故幕府領、当時御料所^与相成候、寒河江・柴橋・白岩、右村々辺所々^江屯集之趣相聞候間、所々巡邏等戒備を厳^ニいたし罷在候、同廿七日戦士松原泰蔵、松野尾五郎右衛門斥候旁、天童藩^江為軍議差遣候処、薩州藩川路七次郎、篠崎東次郎、長州藩内田鎌三郎、諸般為指揮相越居、尚天童藩共談判之上、最上川筋口々^二面防禦之方^ニ治定之旨報告候間、尚又其方面々^江探索之

者差出候処、賊兵^者益々人数を集、最上川向西ノ方所々^江砲台を築き、屯集之由ニ付、無油断所々^江番兵・巡邏等差出置、動靜相伺罷在候処、同廿八日朝、篠崎東次郎・内田鎌三郎長町宿陣^江来り、弥最上川筋口々近隣諸藩^二面固守ニ相決候得共、猶天童表ニおゐて及軍議度候間、弊藩隊中之者参会候様申聞候ニ付、則大久保傳平・戦士川澄憲治差出候処、最上川筋口々警衛場、左之通、軍議相決候旨報告仕候

野田口

右東根陣屋詰罷在候松前藩、北目陣屋詰罷在候土浦藩持場

田井口 溝延口

右天童藩持場

仁田口

右天童藩、及ひ漆山陣屋詰罷在候館林藩持場

寺津口 長崎口 左沢口

右弊藩、及ひ柏倉陣屋詰罷在候佐倉藩持場

右之通配定相成候ニ付、同日薄暮、弊藩領分達磨寺村^江転陣、其^一方^ニ面之口々^江

人数分配固守罷在候処、同廿九日夕寺津口^二面川向^ニ賊少々屯集ニ付、川を隔暫時及砲撃候処、賊忽遁去候、閏四月朔日新庄表御在陣副総督府沢様より、莊賊白岩^江屯集之由ニ付、天童藩申談、早々討拂候様被仰付候御書付、天童藩より通達有之候ニ付、益重相固メ、尚御達之筋^茂可有之^与相待居候処、同二日参謀大山格之助殿、天童宿陣^江罷出候様依御達、水野三郎右衛門・大久保伝平天童^江罷出候処、前件同様固場所至厳^ニ相守、猶各藩談判之上、屯集之賊追討候様御達有之候間、弊藩分隊寺津口宿陣所、領分長崎村之内落合^与申処^ニ於て、川路七次郎・篠崎東次郎共々及軍議、翌三日川を渡り進撃^与相決候得共、外諸藩固場口々^江末夕通達^茂無之趣ニ候間、猶豫罷在、右兩人より達有之次第、諸藩戮力進撃之覚悟罷在、尚斥候巡邏等無怠慢差出置候処、豈図ん哉、同四日拂曉、賊徒何れ之渡船を奪ひ渡り来候哉、口々^江向襲来候趣、巡邏之者及報告候ニ付、夫々手配罷在候内、賊徒凡五、六百人程達磨寺村^并落合両宿陣^江及発砲候間、一時及戦争、賊打斃候分^茂有

咄申候処、同道可致旨ニテ談示相済

八月廿四日（要）（24出立、28帰着）

一此間三郎右衛門・兵衛殿、米藩ニテ御内用筋程立相整候処、此節同藩小田切勇之進当地へ滞留、彼是相談之筋有之由にて今朝六ツ時過り三郎右衛門・兵衛殿同道中早追ニテ米沢へ出立、尤小田切勇之進も旅宿より出立同道之由（十八日には、土佐の降伏勧告が米沢にきている）

八月廿八日（要）

一三郎右衛門・兵衛殿、昨夜上山泊ニテ今朝五ツ時過到着、直ニ参殿、夕刻帰宅、此度は御用向無滞相整候由、則左之通御家中へ以御目付達有之

方今之形勢ニ依而、米沢より上杉主水様村山郡為鎮撫近々御出張、山形御城下寺院江御宿陣可相成候間、兼而為心得相達候事

同日（戊日）

兵衛殿同道上山より昼四ツ頃着、米沢ニテ談示ノ一件一席衆江演説之—中畧—

兵衛殿同道米藩佐藤源右衛門旅宿へ罷越、米沢ニテ談示済之次第申述候、尤モ小田切勇之進モ居合候積リニテ罷越候処、又候勇之進急ニ米沢ヨリ用向当来不居合候

間、宜敷申述候

八月廿九日（戊日）

米沢上杉主税様村山郡鎮撫トシテ近々山形へ御越被成、光明寺へ御滞陣相成候積ニ、御座敷向見分トシテ、某及源内・浅右衛門同道見分

九月三日（戊日） 九・ニ 米沢降伏（米沢年表）

上杉主水様山形御越之次第模様更ニ不相分候間、万端相談ノ為、明日ヨリ米沢へ

吉松善次郎差出

九月六日（戊日）

吉松善次郎米沢ヨリ罷歸、彼地ニテ高山与太郎へ面会、主水様山形へ御越次第申述候処、御尤ニ存候得共方今模様大替り候儀有之候故、此節速ニ御越ニハ及間敷儀ト在候旨、与太郎申聞候由

九月八日（戊日）

米沢ヨリ吉松参り来候件、其辺之模様内談トシテ上山へ嶺岸差出ス

◎前ページ上

駿河守様御嫡子は誤りと思う。主水・主税と両方あるが主水が正しいと思う。（『木曾要人日記』等により）

各地戦闘

山形藩は、初め奥羽鎮撫軍（西軍）に従つて二方面で戦闘、奥羽列藩同盟に参加して三方面で戦闘、降伏謝罪後庄内征討に向う。今回は東京大学史料編纂所所蔵『水野忠弘家記』によつて戦闘状況を紹介したい。

1 新庄・古口方面警衛 一 番隊

一奥羽鎮撫総督府九條様より、於仙台表、庄内御征討ニ付出兵被仰付、尚副総督府沢様山形御通行之砌、為応援早々出兵被仰付候間、四月廿三日一番手戦士隊二十五人、銃頭小林栄隊五十四人、大砲一門・砲手十四人、其外諸士共、隊長友松弥五左衛門引率、出羽国新庄表江同廿五日着陣仕候処、沢様為御守衛右城下巡邏可致旨御達ニ付、昼夜巡邏罷在候

一同廿三日夜半より薩長清川打入（筆者）

一同廿七日参謀方々、庄内勢清川口より襲来之趣相聞候間、同州古口宿江出張可致旨御達ニ付、即刻同所江移陣、新庄・上ノ山藩申合、諸口番兵差出相固居候

米藩古藤伝之丞来り重役面会申込、某(元宣)及源内殿旅宿後藤小平治方ニ訪ネ面会、曰ク天童兎角不安心ノ儀ニ付、隣藩山形ヨリ一応説得云々

八月十二日(戊日)

今朝米藩小田切勇之進上ノ山へ来申聞候ハ、奥州同盟追々相破候モ有之候間、山形ハ同盟確乎候得共、両君公御上京中ニテ何分心配候間、国論承糺シ養子相進可申、右談判へ兵隊ヲ以テ糾問可申候間、六百人最早繰出候間、上山藩モ出兵如何ニ候ヤトノ欠合ニ付、上山藩重役山村縫殿・渡辺五郎右衛門・中村祐右衛門相答候ハ、山形ハ同盟確乎致候間毛頭心配無之候儀、乍去両君侯御上京ニ候間、如何様養子可然、

就テハ右人物有之ヤ、幸ヒ米沢侯ノ甥御末家駿河守様御嫡子主水様ト申御方有之候間、山形処置ニ候ハハ可然相談ニ可相成、右之次第ハ山形藩へモ一応祐右衛門欠合可申候間、夫迄ハ兵隊繰出ノ儀ハ猶予有之候様申候処、左候ハハ右ノ段米沢へ罷越可申聞旨ニテ上ノ山出立ニ相成候間、不取敢サル旨祐右衛門申述候由勘兵衛

申出候、右ニ付某(元宣)、兵衛殿罷越、明日上山迄罷越、尚様子ニ寄り米沢迄モ罷越候積リ(戊日)

原文は蜜岳の抄録で、日も飛んでいるので、ちよつとわかりにくい。要録の関係部分と併読すると理解できるので、要録と併載。

一夜六ツ半過当番七郎殿某(元水)並老衆隠居一同江、以廻状御評議いたし度儀出来候ニ付、雨天之処乍御苦勞只今御出仕有之様被申越候ニ付、即刻參殿、(略)

一右評議之趣意は上山藩中村祐右衛門来り、方今之形勢奥羽同盟之内追々変心之藩も有之、於御家は両君上御滞京ニテ御帰部も不相分儀ニ付、米沢藩にて疑惑之筋も有之、旁々御名儀相立候様にとの内密周施も有之、不容易事件ニ付、御家中惣出仕にて説諭等有之候ニ付而也

但、今日祐右衛門来り、郡奉行嶺岸勘解由江趣意申聞候ニ付、即刻三郎右衛門並兵衛殿被為応接、右御用向ニ付、明日三人共上山・米沢迄出立之積

右評議等相済、九ツ時過席一同ト退出
八月十三日(要)(13出立、21帰着)

一三郎右衛門昼九ツ時前上山・米沢江出立、

兵衛殿、勘解由殿同伴也

八月十七日(要)

一三郎右衛門方是迄度々書状来り、十三日上山泊、十四日米沢へ引移滞留之処、勘解由計今日到着之由以手紙届来ル

八月廿一日(戊日)

昨夜上山止宿、兵衛殿同道昼四ツ時頃山形着、米沢ニテ談示ノ一件一席衆ヨリ委細申候上、猶御家中一同御目見ヨリ呼出順々十人位御当番所へ呼出委細申聞之、米沢藩佐藤源右衛門山形在陣ニ付談示之一件申聞、兵衛殿同道宿陣所旅籠町西屋金兵衛方へ罷越、委細申述置候、其席へ同藩山宮利助居合、仙藩斎藤三左衛門来応対申込、秋元鉄輔罷越

(要ニ重複分除)於米藩応接御名儀も相立、疑惑之筋も無之趣也

八月廿三日(戊日)

米藩小田切勇之進前夜山形着、兵衛殿・嶺岸勘解由、某ト同道旅宿へ罷越応対候処、一件次第尚又談示有之、篤ト評議可致旨ニテ引取、同夕八ツ時迄ヨリ罷越、再談ノ上明日兵衛殿同道米沢へ罷越候積リニ取極候間、勇之進へモ参リ呉候様御

之報知次第御出撃も可被為在候ニ付、此節諸侯一同五十日期限ニ満候分も、凡而帰国御差留被成候間、願之趣不及御沙汰候、將又奥羽形勢之儀は近來御聞込も被為在候ニ付、其方在所詰之家來共江防禦方不都合無之様屹度可申付候事

一、六月朔日、浅右衛門殿江

兩君上り御渡御書付左之通、尤実之御趣意は、山形大藩之間ニ接し、仙台盟主にて云々之次第不得止事情被遊御察、如何様にも周施いたし、大藩ニ依頼候而御城邑保全候様にとの御旨趣ニは候得共、御書付ニ其儀顯し候ては、万一途中にて如何様官軍之手ニ触レ候儀ニ而も有之時ハ以之外之儀ニ付、其辺御真意は御口上ニ而被仰含候旨、意味深長之演説有之

御書付

当今其地之形勢切迫致し候段は不及是非候、奉对朝廷候而ハ大不敬之罪所遁無之候間、時機を相待尊奉之道相立候様致度候、委曲ハ浅右衛門江申含候事

六月朔

忠弘

忠精

六月廿六日(要)

一今後從兩殿様被成下候御書付、並ニ弁事御役所への御歎願書共、御家中惣出仕候而拝見有之、尤浅右衛門殿り御趣意之嫌之演説有之

六月廿八日(要)

一兩君上御在京ニ付而ハ奥羽各藩嫌疑も有之候処、愈々御帰城難被遊候ニ付而ハ、尚被仰下候趣も有之、無摠御事情を以諸事厚ク御頼入之御使者、左之通相定明廿九日出立(右肩。上京者 筆者)

天童・庄内・新庄 三郎右衛門、

北城連之介、劔持豊太郎

同断

仙台

浅右衛門、成田五郎左衛門

七月朔日出立

米沢

族、井上宇兵衛、星野与十郎

明廿九日出立

上山・会津

兵衛、山中司馬、真田勇馬

馬

拝郷族は米沢使節後、続いて越後総司大道寺源内と交替のため越後に赴く。

米沢木滑政愿(要人)日記には、

同日雨

一水野侯り同断(御使者ニ族等)、当侯御父子

京都ニ而御仰留、御引留のよしニ相成候得共、社稷を重シトスル法を以、御家臣一同ハ、已ニ奥州江御同盟之上ハ少も相動き不申候間、此上何事も御指揮ニ奉從候ニ付、御引廻し被下度云々とあるようだ。

浅右衛門の上京日記でも残っていたれば、貴重でありおもしろいと思うが、京着まで一か月を要しているわけである。「家乗」には「方今東西騷擾道路梗塞、其艱難想フヘシ」とある。米藩宮島誠一郎が、太政官への奥羽列藩重役建白書を携えての上京を『戊辰日記』(米沢市史編集資料 料第二十八号)で伺えるが、江戸まで乗った大江丸に乗船したのは、神谷川澄の兩人であつたろうか。この上京に關わつて、浅右衛門は明治二年五月二十日、一藩限りとして処罰を受けている。

7 米沢藩より養子一件

兩君上京中故、山形藩の奥羽同盟離反に嫌疑をかけられるのが当然なのか、その嫌疑を理由に自藩の利益を計ろうとしているのか、疑わしい感じもする。

八月十一日(戊辰)

いの目を向けたことであろうし、奥羽同盟参加に対し異論をもった面々もあつたかも知れない。忠精が山形出立時に、言い置いたこともあつたろう。老職たちが決裁に一番困つたであろう。

六月廿五日（要）

一老志賀浅右衛門殿・大隊頭井上宇兵衛、

閏四月中（十七日）より上京之処、今日帰

着

但

閏4・21 御馬廻大隊 成田五郎左衛門

下 立 星 野 与十郎

閏4・28 御馬廻大隊 劔 持 豊太郎

差 図 役 並 御 先 手 眞 田 勇 馬

追々上京^二而當時之形勢申上

5・19 御 目 付 神谷 四方之助

御 横 目 川 澄 憲 治

仙台より蒸気船にて江戸迄相越候処、浅右

衛門殿始江戸へ帰着相成候^二付、一同同

船^二而仙台へ着岸、夫より帰着、八人也

一浅右衛門殿、京都江五月十七日着^二而、此

地之形勢いさゝ及言上、追々上京の壮士

より申上候趣も被遊御聴、大殿様御帰城被

成度儀^二付、其筋々江被尽御周施候得共

不相叶趣、則五月中被差出候御歎願書、御附札等左之通

○五月廿二日（要）

忠弘歎願書

私領分出羽国山形近傍、去ル四月頃より浮

浪の輩も御座候哉、多人數烏合いたし

閏四月中於所々戦争有之、家来共死傷も

御座候之段、此程御届申上候通^二御座候、

当節^三至り候ては至極切迫仕、城地保全

も無心許程之由、仍^而は父子共早々帰邑

仕防禦之術相尽候様に有之度旨、在所並

江戸表より家来共駈登申聞候事^二御座候、

元来父子共暫漸京、王事^二勤勞仕度情願

も御座候^二前、顕之事件差起候^而ハ、辺

士^下狹溢之小藩封境守保之儀如何にも苦心

至極^二奉存候、右^二付私儀は若年にも御

座候間、先暫此俣在京相勤め、和泉守儀

は御暇被成下候ハ速^二帰邑仕、諸般取締

方申付候様仕度、從來父子之願意には相

障候得共、此節御暇被成下候様奉願上候、

且又熟考仕候^二恐多事ながら、奥羽之

辺、奉抗官軍は無頼之輩も数多有之候由、

万一暴威相張、此末以之外之次第^二立至

候^而は、人民塗炭之場合難堪事とも奉存

候、右等焦慮仕候段^{（フトリ）}与風存付候趣は、憚

多き儀^二は御座候得共、幸ひ隣国仙台家

を始、從來懇意にも御座候^二付、夫々語

合取扱候は、成否は難量候得共、御鎮

定之御一助にも候哉と心付候間、可相成

は御内沙汰にても被成下候（脱力）皇国

之御為一臂之力相尽、微忠相表し申度、

右赤心之趣万^一御採用にも相成候は、前

文申上候御内沙汰之儀奉蒙仰度、且和泉

守儀は兎角至急^二御暇被仰出候様仕度奉

存候、將亦奉願上兼候次第^二ハ御座候得

共、領分之儀は狹溢^二不相応手広之城郭

二有之、小藩人少にては口々分配も引足不

申、自然守城難堪敗走之段^二立至り、藩屏

之任難立時宣^{（宣力）}三相成候節は、王事勤勞之

微忠御愛慇被成下、後來迄無相違本領安

堵被仰付被下置候様重々奉懇願度、可相

成御儀^二候ハ御書付^二ても頂戴仕置度奉

存候、右等件々幾重にも奉歎願候 以上

五月廿二日 水 野 真次郎

辨事御役所

同月廿八日御附札（要）

去ル十五日於江戸府兵端相開候（上野彰

義隊力）。付^而ハ、兼^而被仰出候通、追々

近々出兵するので、羽州各藩からも援兵を依頼されたが、即答できないとして、廿日早追で出立、翌廿一日朝山形出立の元宣と新山で遇い、兩人とも早追で参殿（山形）。その日八ツ時過同道白石へ出立する。廿二日白石着。（同22日元宣の長男亀太郎出生）

九條総督は仙台で軟禁状態になる。廿日は下参謀世良修蔵暗殺があり、会津・庄内征討軍の解兵届を出す。

解兵届

先達而酒井左衛門尉朝敵三付、征討并応援等被仰付候り各藩出兵仕候処、左衛門尉儀者官位御取上之御沙汰^茂無之^{而已}ならず、太政官^り登京被相促候儀^茂有之哉三相聞、自然衆心疑惑を生し候上、固り僻遠之境^三隔り居候人民二御坐候得共、徳川慶喜東下之後、主として恢復を謀候趣被仰出候、其罪蹤跡茂分明三承知仕兼候二付、奥羽諸藩尽衆議申度与打寄候処、最初佐竹右京大夫^り問罪之上出兵仕度旨相伺候節、以御演説其儀者難被及御沙汰旨被仰渡、益々難免疑惑候得者、猶此上幾度^茂奉汚尊聴候儀、甚以恐縮之至与一同評決仕、左衛門尉罪状之儀、太政官江相伺申候内、徒三畝日持久庶民農業之節

を妨候^茂、朝政御一新、深く御仁恤を被為垂候御趣意^三茂相悖候哉^与一同奉恐縮、奥羽各藩衆議之上、太政官^り御沙汰有之候迄者、一先解兵仕候之間、此殿御届申上候 以上

南部美濃守家来

閏四月

野々村 真澄

佐竹右京大夫家来

戸村 十太夫

津軽越中守家来

山中 兵部

戸沢中務大輔家来

舟生 源右衛門

水野真次郎家来

水野三郎右衛門

藤井伊豆守家来

山村 主税

六郷兵庫頭家来

六郷 大学

岩城左京大夫家来

大平 伊織

生駒大内藏家来

椎川 嘉藤太

右何連茂実名花押

右を、昨廿五日総督府へ進達、落手された

ことを、仙台但木土佐が、前記差出人に通達している。（廿六日）（水野忠弘家記）

前記、沢副総督警衛のための米沢藩ほかの出兵は、情報が洩れ、沢が秋田脱出し不成功であった。

6 両君帰城を願う

前節、各藩連名歎願書を提出後、白石滞在をいわれるが、山形表至急之用向があるので、特に申入れて山形へ兩人とも閏四月十四日白石出立、翌十五日夕八ツ時帰着、参殿している。（山形表至急P7下段）

閏四月十七日（要）

一方今之形勢申上、両君上御帰城被為在度儀三付、浅右衛門殿・大隊頭井上宇兵衛^{（平次）}京都へ早追にて出立有之

このための準備として、会合・打合わせが至急の用向きでなかったか。兩人白石滞在中も留守の人々が打合わせをしたり、白石と連絡をとりあっていたかも知れない。一方では、後述のように、参謀大山格之助に届けて、入間方面出張の一、三番手が山形へ帰ってきたのは、廿四日の曉であった。

藩主在京のため、諸藩が山形の向背に疑

達と御賞め頂いたのは、忠精の洋式銃隊稽古推進の賜物か、これからの応援出兵のためのおだてもまじっているのか。

5 奥州列藩同盟

同八日^(四四)此度仙台・米沢両藩家老ヨリ、奥

州白石陣所へ出張ノ義申越候処、同席評議ニ

テ、元宣ハ上席タルヲ以テ出張スヘキニ決シ

此時同職上席并郷内
蔵直利在江戸ナリ
此行、開施方笹本藤馬ヲ召連ル、其後二至リ、各藩
へ出張スル毎ニ副使或開施方等同行スレトモ皆省ク

一閏四月六日仙台・米沢両藩家老ヨリ、左
之通手紙^(四)至來

以手紙致啓達候、陸奥守并彈正大弼儀、

会津容保御追討之先鋒被仰付、陸奥守

被致出陣候処、今般容保家来共陣門江

相越、降伏謝罪之儀歎願申出候ニ付、

致御衆評度候間、御重役方之内、白石

陣所江早々御出張相成候様致度候 以上

閏四月四日

上杉彈正大弼家老

竹 俣 美 作

千坂太郎左衛門

伊達陸奥守家老

但 木 土 佐

水野平馬様

坂 英 力

御同役中様

(家乗)

平馬は元宣の父、元治元年三月隠居仰付
られている。国元での他藩との交際などは、
どうなっていたのであろうか。

水野三郎右衛門・笹本藤馬同道、閏四月

八日山形表出立、同九日白石へ着候処、仙

台侯ハ三月中ヨリ当地ニ御出陣相成居候由ニ

テ、同十一日米沢侯白石へ御着、同夜仙藩

但木土佐・米沢竹俣美作兩名ニテ致衆議度

有之候間、片倉小十郎家来佐藤雄記宅へ

早々出席候様廻文ヲ以テ申越候間罷出候処、

仙藩坂英力・但木土佐、米藩千坂太郎左衛

門・竹俣美作等申聞候ハ、此度会津降伏謝

罪歎願書重役共ヨリ陣門へ差出候ニ付、国

情探索致候処相違モ無之故、両中将ヨリ歎

願書ヲ以テ総督府へ進達致度、各藩ニ於テ

モ共々同意致シ、別紙之通歎願書へ連名致

シ呉候様申聞候処、最早各藩重役モ疾ク相

詰居リ、評決ノ様子ニ付、大閏間ニ接シ候

間何分難辭、任其意加判仕候、各藩出席姓

名・歎願書左之通ニ御座候(戦況報)

とあつて、十五藩三十六名の名が書かれて

いる。十一日以後の到着藩もあった。

同十二日右歎願書三通<sup>(四行後に、
名一筆者)</sup>、仙台領岩

沼御在陣総督府江御進達之旨ニ而仙米両侯

白石御出立、同十三日酉ノ刻仙台侯ハ白石

江御歸陣、米沢侯ニ者途中御一泊之由ニ而、

翌十四日白石江御歸着、会津歎願書并^イ両侯

御添願書・各藩連名歎願書共、総督府御預

り相成候旨、併鎮静迄暫之間各藩重役相詰

居候様、仙台重役より演達ニ候得共、山形

表至急之用向有之候ニ付、五六日之間歸国

いたし度旨、達^ニ而申入承引ニ相成、水野三

郎右衛門、笹本藤馬兩人とも、同十四日白

石出立、翌十五日山形江歸着仕候処、(夕八

ツ時過頃白石ヲ歸着、直ニ參殿ニ要) 老人茂

滞在不致候^{而者}不都合之儀^{茂可生与}、猶亦笹

本藤馬義出張いたし、同十八日白石江到着

仕候処、十九日総督府よりの「朝敵不可入

天地ニ罪人ニ付難被及御沙汰、早々討入可

奏成功者也」という通達を見せられた。廿

日各藩会議所へ呼出し、「総督府白川城江御

転陣之旨被仰出候得共」人心不安の折から、

仙台へ歸陣を願う書面に署名を求められ藤

馬が代筆署名した。また新庄表在陣之副総

督警衛を、総督府より米沢に仰せ出され、

水野藩で足高制を採用したのは、今の所忠光時代と考えているが、年寄役は三百石高で、家禄の不足分を在任中増して、人材登用を図っている。(大道寺・志賀・領質も足高で三百石と思うが証拠資料がない)

元宣父平馬元永は、元治元年三月廿三日思召有之候ニ付、御役儀御免隠居被仰付、屹度慎可罷在候旨」仰出され、慶応四年二月十七日慎御免、隠居料二百俵、括囊斎と改めた。他に水野一鉄斎(小河三郎・家老並)、関堪澳(秦継・年寄)、清水一専斎(帯刀・年寄)と元重臣の隠居がいた。

家老は代々拝郷源左衛門家と水野三郎右衛門家で、家臣たちは家老と呼んでいたようであるが、天明二年六月十五日に、両家の役名向後家老と改、勤向如故と命ぜられている(『庶士伝後編』)。なお、用向きによって、やや長期に江戸に滞在を命ぜられることはあっても、江戸家老という制度はなかったと思われる。

拝郷内蔵は江戸に行っている。忠精の帰邑前後と思うがどうであろうか。

忠精江戸へ出発(3・5)、奥羽鎮撫総督松島到着(3・19)、沢副総督一行山形着(4・17)↓上山↓天童↓新庄・達磨寺・落合口

戦争(閏4・4)、入間方面戦争(閏4・11)、閏四月十一日の白石会議から五月三日奥羽列藩同盟に至る間、一名の家老と四名の年寄だった。多いから良いわけではないが、年寄から当番(月当番か)が出ており、重要案件は家老・年寄の会議を持っている。両公の帰邑を願いに上京した志賀浅右衛門が帰形した六月二十五日に新たに五名が年寄役を仰付っている。これは藩主の命か承認の結果であろうか。だが、八月二日の水野式膳の家老並、当番加判御免・役料改而式百俵、また、子の雅楽之助が年寄役・改而五十人扶持。これはどうなるのであろうか。忠精上京以前の委任か、町便などによるか。

Ⅱ(一)内数字は月日

4 奥羽鎮撫軍奥羽出張

諸書に委しいが、山形藩関係に止め、所々に、筆者の説明や疑問等を挟んでいく。

四月十一日として、奥羽鎮撫総督九條左大臣様、副総督沢三位様、参謀醍醐少将様奥州仙台へ御出張ニ付、為御使者老職大道寺源内仙台出張中、本月三日忠弘公へ、今般羽州庄内征討ニ付応援出兵ノ手当可有之、

期限ノ儀ハ追テ可相違旨、御達書総督府ヨリ御渡ニ付、応援ノ兵隊、総司元宣引率シ、御達次第出張ノ事ニ決ス(家乗)。

この十一日は源内の山形帰着の日らしいが、お達書の三日との関わりがわからない。沢三位一行の出羽入りの委しい記載の書もあるが、「家乗」から筆写する。

同十六日副総督沢三位様御領分新山村御泊参謀薩州藩大山格之助及ヒ薩長兩藩ノ兵隊凡式百人余随行ス依テ御機嫌伺トシテ御旅宿へ罷出御逢アリ、同十七日当所(山形)御昼休ニ付前日ノ如シ、同夜上山御泊ニ付罷出御逢等如前、同十八日同所河原(見日原)ニ於テ、山形・上山及ヒ薩長ノ兵隊調練御覧アリ、兵隊一同へ樽肴被下候ニ付、御旅宿へ為御礼罷出候処、御逢ニテ調練熟達之旨御賞アリ、同十九日当所御昼休、都テ如前、同夜天童御泊付、罷出、廿日御逢ニテ庄内征討ニ付、応援ノ出兵、来ル廿四日迄新庄へ可為着陣旨御達書御渡アリ、

実際は、廿三日一番手友松弥五左衛門引率出立、廿五日新庄着。廿六日二番手を総司元宣引率出立、天童宿陣の処、庄内勢の天童襲来の風聞が入り、山形防衛に変更。以下戦闘の部に譲る。さて、見目原の調練熟

戦 闘 以 外

1 忠弘・忠精の上京

慶応三年十月廿二日、伝奏日野大納言殿亭へ京地詰ノ家来喜村半六ヲ召シ呼レ、別紙ノ通(略)仰出サル、ニヨリ早々上京ナサルヘキ旨仰出サル(略)、十二月十四日今般御所ヨリ召サセラレシ処、病氣且幼若ニヨリ重臣ノ者（佐々木）ヲ代名トシテ差登サル、（不）(10・14慶喜大政奉還ヲ請、15許)

慶応四年三月五日忠精江戸へ出立、十七日奥州矢吹駅より立戻り、廿二日極御忍にて御道中式膳御名前にて江戸へ今朝御発駕(要)、廿九日着府(不)。ちようど、奥羽鎮撫総督一行の仙台松島列着(3・19)と入れ替りの感がある。慶喜の東叡山大慈院謹慎(2・12)に関わる連絡でも山形へ届いたのであるうか。奥羽の多くの大名は国元にいるか、この前後帰邑している。

忠弘は、四月十日病氣を押して上京、忠精の心添としての同道は願済。廿一日江戸発。閏四月十二日着京。廿八日両侯初めて

参内、天機を伺い、大宮御所へも御機嫌を伺う。五月九日両侯参内誓約、廿四日忠弘は和泉守・従五位下、忠精は越前守と改。翌廿五日参内、御番の諸侯と共に乗馬を天覧に入れる。以上、主として「不」により略述。

2 山形藩の情况

『慶応度山形藩臣分限録』(武田喜八郎氏蔵写)は、慶応二年と考えるが、「正月元日高三而寄」として、惣人数千百貳拾壹人とし、内訳は(筆者数字見易くした)、

三六六人	御歩士以上	六八八人	山形
五一〇人	足輕等	四二七人	江戸
二一四人	諸中間	五人	大津
三一人	女中	一人	京都

戦闘時は部屋住なども採用して多くなっているだろうし、江戸詰は、京都と山形へ何人かうつしているのではないか。

3 山形藩重役名簿(慶応四年)

分限帳はとびとびしかなく、範囲も全体にわたるのではないように思う。降伏後、兩殿様へ元宣始め年寄衆一同歎願書、主裁の廉を以て、元宣一名の歎願書を、郡奉行秋

元鉄輔に持たせ出発させるが、それに各自署名しているので(在山形)、それをを用い、慶応二年、明治二年と思われる分限帳その他を参考に筆者が作成した。(石高少々疑問)

高 氏 名
年月日

家老

一高千三百石

安政四、〇 押郷内 蔵直利

一高千三百石

元治元、二 水野三郎右衛門元宣

家老並

一高四百石

慶応四、八、二 水野式 膳信輓

年寄

一高七百石

慶応四、六、二 二本松 大 炊義達

一高三百石

万延元、三、九 鈴木 文右衛門敬昌

一高貳百五十石

慶応四、二、七 大道寺 舍 人直知

一高貳百石

慶応四、〇、七 志賀 浅右衛門清直

一百人扶持

慶応四、六、二 押郷 五左衛門直道

一高六百石

慶応四、六、二 水野 小河三郎義将

一高三百石

慶応四、六、二 友松弥五左衛門信義

一高三百石

慶応四、六、二 石原平治右衛門重明

一五拾人扶持

慶応四、八、二 水野 雅楽之助信行

年寄(江戸詰)

一高三百石

万延元、八、二 青山 老之助清通

一高二百石

慶応二、四、二 値賀 七左衛門 尚

一高五百石

嘉永六、九、二 岩崎 彦右衛門勝興

○印は慶応四年五月以前からの家老・年寄

階で明後廿九日に差立てたいと答えているが、あとはわからない。前記『水野忠弘家記』によると、十二月として、水野和泉守家来在所詰重役として、水野式膳・二本松大炊・鈴木文右衛門・志賀浅右衛門・拝郷五左衛門・水野小河三郎・友松弥五左衛門・石原平治右衛門・水野雅楽之助の連名で報告がある。

また、「明治二年正月廿日軍務官へ差出候書付」の題で、帳面四冊・書付一通を水野越前守（忠精・和泉守 謹慎中につき）家来宇津木衛士が出している。また、水野和泉守重臣東京詰として、拝郷内蔵・岩崎彦右衛門・青山老之助・値賀七左衛門の名で、昨辰年中和泉守父子上京之始末并在所山形へ差置候家来共取計振等の御達を受け、帳面四冊を差上る。また在所表重役九人の外の、水野三郎右衛門は謹慎中、大道寺舍人は旧臘（十一月）病死で除名した旨を添書している。

従って、十一月二十日に命ぜられ、翌二年正月晦日に最終報告書提出ということになると思われる。

『水野忠弘家記』『諸藩記録』（朝日山藩記）には、右軍務局への報告以外の、命令書・達書・報告・願等の記載もある。

5 日記類と戦後報告書

日記は、元永・元宣も自分の感想や意見は殆ど述べず、事実についてのみ書いているようである。元家老・家老という立場で視野も広く、資料も写しているが、自ずから範囲に限界はあるようだ。それに比べ、報告記録的なものは、例え曲げて書かなくとも、都合の悪い点をカットしている恐れはある。七月十一日新庄藩が突如同盟側から離反し、山形藩など戦死傷者を出しひどい目にあう。要録は

「十一日朝俄ニ戦争、新庄藩も西軍に属し候趣ニテ、我軍敗走之由」と書き、戊辰日録には「昨十一月朝より始まり味方大敗軍にて、何れの処へ散乱に相成候哉不相分候得共、不取敢注進の段」と書いている。そんな事も考え、「戦況報告書」の作成のことを、やや委しく書いてみた。ただ、私の読みとりに誤りがあればご指導を。

6 忠精の藩政改革

慶応三年三月十一日病氣ニヨリ、山形へ相越サレ赤湯温泉汲湯入浴願ヒ給フ処、即日相済、四月六日江府発駕、十六日着形セラル（不掲載）とあるが、『家乗』には、同四月十七日山形御得替後、往古ヨリ之振合ヲ以テ下屋敷地拝領ノ処、方今之御時勢ニ付テハ恐入候間差上度旨書付差出、直ニ相済（此時忠精老公御病氣御療養ノ為メ、四月十六日ヨリ御在邑ニテ、実ハ御藩政向百事流誠、御変革ノ際ニテ、拝郷内蔵直利モ同シク返ヒス）同十九日経誼館（藩校）へ折々相越、諸士文武等モ世話可致旨被仰出、六月十九日御軍事御改正ニ付、取調御用向取扱被仰付、（是ハ銃隊等洋式ヲ以テ編制ノ取調ナリ、七月十日忠精老公ヨリ銃隊舊出精上達ノ旨ニテ、懷中時計、御小納戸ヲ以テ拝領ス、）八月二日農兵取立方引受可取扱旨被仰出、十二月廿二日銃隊稽古之儀ニ付テ、当夏以来ハ別テ骨折候旨ニテ、銀三枚拝領ス、（老公御在邑以来、魚鳥菓物并類等屢御小納戸ヲ以テ賜レトモ省ク）明治元年戊辰―中略―（月廿六日忠精老公ヨリ、本部拾御羽織一、黒紗細袴一、御小納戸ヲ以テ拝領ス、三月廿二日老公江戸へ御発駕アリ）とある。老中を勤め、天皇・公卿・西国はじめ諸藩の動きも知悉し、外国係をも勤めている。改革の成果はどの程度であつたらう。三郎右衛門家の資料であり、元宣一人で改正が行われるわけはなく、拝領物は他の人々へもあつたのではと考えるがどうであらう。

4 「戦況報告書」作成経過について

前記(一)1要録(明治元・12・9)、及び4戦況報告によれば、

一、軍務官より重臣御呼出^{「下り二年坊立也」}三付、去ル廿日老之助・関口釣同道罷出候
処、下参謀補助香川敬藏殿面会、被相達候者、当夏両君公^{「公卿」}(忠弘・忠

精)御上京被成候次第、井山形表^{「下り二年坊立也」}におて所々江出兵有之候次第、

以書面両三日中ニ差出候様被申間候間、早々取調、別紙之通昨廿

三日持参差出候処、右敬藏殿面会、得と一覽之上被請取候^{「下り二年坊立也」}而、猶

又被申間候ハ、右書面ニテ一通りハ相分り候得共、出兵先キ戦争

之模様更ニ不相分候ニ付、右之模様委細以書面被申間候様、尤薩

長其外出兵候之向より委細承知いたし居候得共、其藩より被申出候

儀承知不致候テハ不都合之儀も有之候間、書面を以可被申出候様

致し度、若し此地ニテ不分候ハ、早々山形表江申遣、分り次第被申

出候様ニとの事御達有之候間、早々取調被申越候様致し度候事

という、十一月廿四日付の東京からの書面と共に、十一月廿三日付

江戸重臣の名で出した第一回目の「御届書之写」も載っている。軍

務官ないし香川の意図は何であつたのだろう。結果論だが十二月七

日奥羽越諸藩処分発表、八日天皇帰京出発となる。処分を前に噂が

飛び交い、情報収集、対策が練られていた時期ではないかと私は憶

測する。第一回御届書の内容は、両君公が勤王の誠意をもつて行動

したこと、勤王の儀は祖先以来の申伝であることとその例。山形表

では、主人留守中奥羽御征討応援を申付置、御達次第庄内勢と戦争

しかし、奥羽合従の儀差起り、小藩ゆえ止むを得ず従い、米沢藩よ

りの催促で所々へ出兵、後、米沢藩より、厚き配慮を伝承、一家中

謝罪歎願の趣聞届けられ、在処表の者共一同謹慎、庄内征討お達し

通り即日出兵。三郎右衛門は奥羽盟会の節連判も致し、名分順逆を

誤った基本で嚴重謹慎申付、他の者共も慎んでいるよう申付、「猶此

以後、天裁被為済候上は、一藩限りの仕置申付候事ニ可有御座候」

と結んでいる。まさに天裁のための自己申告の感がする。これでは、

薩長等から委細承知している云々と脅しをかけたくなるだろう。

十二月二日山形に着。当番拝郷五左衛門から元宣へ、落合・達磨寺

村戦争は貴君が総督の事だから、明朝迄申越よう隣家を通して^{「元宣」}

めて「諸方戦争の次第」として、水野式膳等十名の名で十二月五日

出した。なお、出張口々の隊長が書いたので文面等区々なこと、隊

長名は文面に入れず別紙にしたことを添書したらしい。十五日夜東

京着。両殿様のご覧にいられた。熟覧の上、ア、最初と最後は官軍に

属した出兵故一冊。イ、他は賊軍随従故、最初に盟会の趣をつける。ウ、

出兵毎に隊長の名・引率人員・死傷者名など委細に、エ、何処迄進撃

したか、勝敗の様子、オ、新庄開城引去候処をもう少々委敷、カ、降伏

謝罪の始末柄等々。模様よく書いても、却て腹黒き取計と取られる。

都て詳密に、軍務局へは延日のお断をしておく、といった十七日江

戸宿継便が二十六日暁山形着。当番文右衛門に代り弥五左衛門が、^{「元宣」}

仙台盟会の次第を書くよう、御殿七人の名で元宣に依頼する。元宣

は仙台同行の笹本藤馬との面談を依頼、二十六・七両晩相談する。

二十八日元宣は、1前回報告の達磨寺・落合の添削、2降伏謝罪次

第の草稿を弥五左衛門に届け、3盟会一件書面を夕刻届けている。

弥五左衛門より落掌、御苦勞の旨返事。また弥五左衛門は廿六日段

てきているが、残念ながら山形水野藩関係の資料が少ない。降伏謝罪した藩だったからであろうか。それにしても、個人として書いた日記などは残っていても良さそうに思うが。仙台とくに米沢に引きずられた戦争であつたからであろうか。以下列挙し多少解説を付しておきたい。

(一) 『山形市史編集資料』第19号 山形藩明治維新史料 山形市史編集委員会

1 要録(慶応四〜明治二)水野元永(元宣父)日記 抄(以下「要」と略)

2 戊辰日録(慶応四) 水野元宣日記(元本なし)抄(以下「戊辰」と略)

○五月六日〜二十五日 緒川禎太郎氏抄録

○六月九日〜七月十二日 『水野三郎右衛門元宣略伝』

○八月九日〜十一月四日 菊地蛭岳抄録

解説によると、編者後藤嘉一氏が苦勞して集め編集したもの。

3 家乗 家老水野三郎右衛門家(代々三郎右衛門を名乗っており他の水野家との混同を避けるため)の歴史

Ⅱ本篇二冊・系図一冊。元永執筆。第二編は元永本人以降、元

宣の子亀太郎(元伯)等まで。Ⅱうち元宣分(明治十六年十二月執筆終)

4 山形藩戊辰戦況報告書 菊地蛭岳写本、元宣筆力(以下戦況報告と略)

(二) 『山形市史編集資料』第20号 山形藩藩置県関係史料 山形市史編集委員会

1 山形藩水野家分限帳

2 明治初期山形藩雜録、東京都立大学附属図書館「水野家文書」

の中から、後藤嘉一が採録

3 要録(明治三〜五年) 元永日記(一)1の続き)

4 家乗 前記 元永・元伯の分

(三) 『山形市史編集資料』第3号 小立日記 一市民の疎開日記

(四) 『不揚録』北島正元校訂(日本史料選書) 近藤出版社

山形藩主水野家々譜 正編は十代忠光迄、塩谷宕陰。続編は十一代忠邦から十三代忠弘まで。明治以後の執筆、筆者不明。(以下「正」と略)

(五) 『復古記』全十五巻、一九七五 東京大学出版会

明治五年太政官正院に歴史課設置。長松幹を主幹として史料収集、明治二十二年十二月に完成。東京帝国大学史料編纂所として、昭和五年刊行された。政府側・反政府側を問わず資料を集めている。(吉川弘文館『国史大辞典』該当項目より筆者要約)

3 『復古記』と『水野忠弘家記』『諸藩記録』

『復古記』は、膨大な資料集であるが、方面別・月日毎、さらに内容を総括する見出文を掲げ、その具体的内容として、各藩その他の資料を並列し、その出典をも付記している。山形藩の動きが簡略でも、他の資料によって補える面がある。山形藩の出典は、『水野忠弘家記』『朝日山藩記』となっている。通常編纂物は、資料全体でなくカットされているのが普通であり、是非みたいものと思つたが、東京都立大学図書館の『水野家文書目録』には載っていない。半分諦めながら心にとめおいた。たまたま『旧華族家史料所在調査報告書』によつて、東京大学史料編纂所所蔵とわかり、山形県立図書館の御好意を通して頂くことができた。

注 水野藩は、明治三年五月九日羽前国支配地上地を命ぜられ、七月十八日支配地代地として、近江国浅井に於て管轄を命ぜられ、十一月廿七日浅井郡に藩庁建設と藩名を朝日山と唱えることを伺つて、同晦日許可。翌四年七月十四日廃藩置県によつて消滅。因みに、『日本教育史資料』明治廿三年、廿五年刊)にも「山形県」と「朝日山藩」と両方から資料が出されている。

山形水野藩 戊辰の役 — 資料で確かめる —

川 瀬 同

山形藩の戊辰戦争については、先輩郷土史家の書かれたものが幾つかある。私としては、資料によって戊辰戦争をあとづけてみたいと考えた。あとで資料名を掲げるが、極めて少ない感じをうける。その前に、藩主水野忠精・忠弘について、梗概を述べておく。

1 水野忠精・忠弘と山形

水野家十一代藩主忠邦は再度老中になったが「弘化二年二月廿二日52歳依願役儀免ぜラル」^(八四五)「九月二日御用ノ奉書到来、嫡子金五郎(忠精)同道致ス可キ旨ニヨリ」名代差シ出サレシ処、「勤役中不正ノ取計之レ有ル段追々御聴ニ達シ、急度モ仰付ラル可キノ処、出格ノ思召ヲ以テ加増一万石^(天保十年三月十八日加増)、本地ノ内一万石並居屋敷召上ラレ、隠居仰付ラレ、下邸へ相越シ蟄居謹慎罷在ル可キ旨仰出サル。」九月二日子の忠精が十四歳で家督、五万石を賜り、十一月晦日山形へ所替を命ぜられ、翌三年閏五月七日山形城受取。七月二十一日山形附郷村市街受取る。^(八四九)(年令表記法・一)内は筆者

忠精の入部は嘉永二年七月二十六日18歳江戸発、八月七日着城。

翌三年五月十日山形発二十日着府。在城中領地村々を巡見、高年者に真綿一包ずつを手自ら賜わっている。この国入りには、忠邦に忠精の輔導を直接託された儒者塩谷宕陰(41歳、^(後幕府 儒官))も従い、『山

形従役詩』を残しているが、現実を前にしての輔導は良い機会であつたろうし、藩士たちをも励まし戒めもしている。以後は、

○嘉永四年七月十二日着城。翌五年五月十一日山形発。

○安政二年八月二日24歳着城。翌三年五月十一日山形発。途中山川

万松寺(初代忠元から十一代忠邦までの墓地^(茨城県結城市))に参詣、以後

は幕府役職に就き来れなくなる。

嘉永六年三月晦日22歳奏者番。安政五年十一月二十六日27歳兼寺

社奉行。万延元年十二月五日29歳若年寄。文久二年三月十五日31歳

老中。慶応二年六月十九日35歳免老中、差控。八月九日免差控。九

月二十五日致仕。忠弘家督11歳。忠精の寺社奉行・若年寄・老中期

間は、將軍家茂の治政下^(安政5・10・25)に属する。文久二・元治元

の上洛はお供で、慶応元の長州再征は江戸留守。なぜ老中を罷めさ

せられたか、私は探り得ていない。また、なぜ隠居したのか、自身

の年令、子の忠弘の年令を考えても早すぎる感じがする。^(不掲載)

2 山形藩戊辰の役資料

戊辰戦争関係の資料や著作は膨大なものがある。とくに県・市町村史本篇、また資料篇が出され、武士たちの動きだけでなく、農兵や軍夫として、また、被害をうけた町民や農民等の資料も紹介され

平成12年2月25日印刷

平成12年2月29日発行

山形県立博物館研究報告 第21号

編集・発行 山形県立博物館 ©

〒990-0826 山形市霞城町1番8号

電話(023)645-1111

印刷所 株式会社 大風印刷

